

追手門学院大学ベンチャービジネス研究所・茨木商工会議所商業部会 共同調査

2025年度 茨木フェスティバル 「茨木の交通と暮らし」アンケート結果分析

葉山 幹恭・宮崎 崇将・稲葉 哲・村上 喜都
追手門学院大学ベンチャービジネス研究所

目次

はじめに

アンケート当日の実施状況

1. 回答者の基本属性
2. 〈問1〉あなたが茨木市内でよく利用する鉄道(モノレールを含む)の駅はどこですか？(複数回答可)
3. 〈問2〉〈問1〉で回答した駅を利用する頻度はどれくらいですか？
4. 〈問3〉〈問1〉で回答した駅を利用する目的は何ですか？(複数回答可)
5. 〈問4〉〈問1〉で回答した駅周辺に不足していると思う施設・お店は何ですか？(複数回答可)
※〈問1〉で「⑫ 駅を利用しない」を選択した方は最寄り駅(茨木市外の方で「⑫ 駅を利用しない」を選択した方は茨木市内でよく訪れる地域)に不足していると思う施設・お店をご回答ください。
6. 〈問5〉阪急茨木市駅西口の駅前広場に特に必要だと思う施設は何ですか？(最大3つまで)
7. 〈問6〉JR茨木駅西口の駅前広場に特に必要だと思う施設は何ですか？(最大3つまで)
8. 〈問7〉茨木市内で移動に利用・使用する手段は何ですか？(複数回答可)
9. 〈問8〉中心市街地(主にJR茨木駅から阪急茨木市駅の間)で人が中心の歩いて楽しいまちを実現するために特に必要だと思う施設は何ですか？(最大3つまで)
10. 〈問9〉その他「茨木の交通と暮らし」についてご意見があればご記入ください。

おわりに

はじめに

本アンケート調査は、茨木市の市民祭りである「茨木フェスティバル」における市民の方々への意識調査を通じて、茨木市の商業発展、安心・安全なまちづくりに資する基礎資料の作成を目的としている。具体的には、2025年7月26日(土)・27日(日)に開催された「第51回 茨木フェスティバル」に茨木商工会議所商業部会と共同して出展し、市民に向けた「茨木の交通と暮らし」と題したアンケート調査を行い、集計と分析を行うことで、茨木市の商業発展、安心・安全なまちづくりに資する基礎資料の作成を試みている。

また、アンケートの実施に関しては、その収集と集計の効率化を鑑み、新型コロナ禍以降で導入したスマートフォンやタブレットを活用した電子的な形を引き続き採用した。加えて、本年度は「中心市街地(主にJR茨木駅から阪急茨木市駅の間)で人が中心の歩いて楽しいまちを実現するために特に必要だと思う施設」についてのアンケートも実施している。さらに、本調査体制となった2022年度からの結果の年度間比較も部分的に行っている。

アンケート当日の実施状況

茨木フェスティバルに茨木商工会議所と共同で2日間ブースを出展し、そこで茨木市民アンケートに取り組んだ(写真1)。今年度からベンチャービジネス研究所の稲葉哲所員も参加し、商工会議所商業部会副部会長の虎谷氏と26日には稲葉所員の監督のもと、追手門学院大学地域創造学部稲葉ゼミと経営学部村上ゼミ、さらに有志の学生の計9名がアンケート回収に取り組んだ。同じく27日は虎谷氏と宮崎の監督のもと、経営学部宮崎ゼミの学生が10名参加しアンケート回収に取り組んだ。アンケートの回答を増やすために、協力していただいた方にお菓子すくいをしてもらった



写真1



写真2

(写真2)。学生は、列の整理とアンケート回答のサポート、お菓子すくいに役割を分担して取り組んだ。

今年度もアンケートの回答にはGoogleフォームを活用した。事前に商工会議所の中野氏と意見交換を行いアンケート項目を整理し、Googleフォームを使って回答フォームを作成した。GoogleフォームへのリンクをQRコードにして印刷し、参加者のスマートフォンなどで読み取ってもらい回答してもらった(写真3)。また、スマートフォンを持っていない子どもや、操作に慣れていないことが想定される高齢者の方を念頭に、ベン

チャービジネス研究所からタブレットを3台借用して、学生がサポートして入力するようにした(写真4)。

近年の猛暑への対応で今年度からイベントの開始時間が昨年までの13時00分から15時00分へと後ろ倒しになった。それにより回答者数の減少が危惧されたが、結果的に、例年通り多くの参加者に協力していただくことができ、両日とも18時30分頃には1日500件の目標を達成し、2日間で合計1,044件の回答を得ることができた。



写真3



写真4

1. 回答者の基本属性

アンケートの回収数は1,044件、無効回答と判断したものが0件、よって有効回答数は1,044件であった。無効回答の判断に関して、郵便番号を入力する箇所での入力ミスと思われる回答が複数件あったが、それ以降の質問には正確な回答が行われていたため、有効回答と

して扱っている。

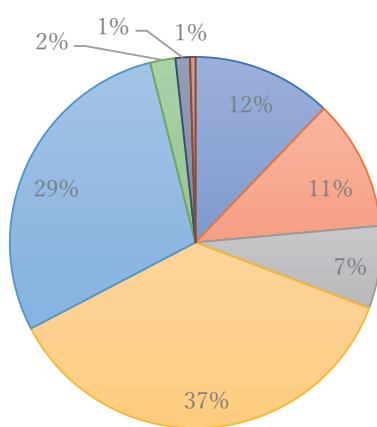
なお、以下の分析では、各質問の全体結果以外のほとんどの箇所で積み上げグラフを使用している。これは多くの設問が複数回答可であり、各属性の中でどのくらいの割合で選択されているかをわかりやすくするためである。ただし、文中では属性ごとの比較のため、

各設問で各属性を母数とした各選択肢の回答割合を出して説明しているところがある。グラフに表示されている割合と文中の割合に相違がある部分は、この違いが原因であることを先述しておく。

1-1. 年齢

アンケート回答者の年齢構成（図1-1.1）を見ると、最も多かったのは30歳台で、全体の約37%を占めている。次いで40歳台が約29%、3番目に多かったの

は9歳以下で約12%、4番目が10歳台で約11%となっており、子育て世帯を中心とした比較的若い世代がアンケート回答者に多い結果となっている。なお、この結果は図1-1.2でわかるように継続的に同様の傾向が出ている。今回は、前述のとおりアンケートの実施時間が変わったことで、回答者の変化が見られるかを注視していたが、実施時間帯による顕著な変化は確認できなかった。



■ 9歳以下 ■ 10歳台 ■ 20歳台 ■ 30歳台 ■ 40歳台 ■ 50歳台 ■ 60歳台 ■ 70歳以上

図1-1.1 アンケート回答者の年齢構成

出典：アンケート結果より筆者作成。

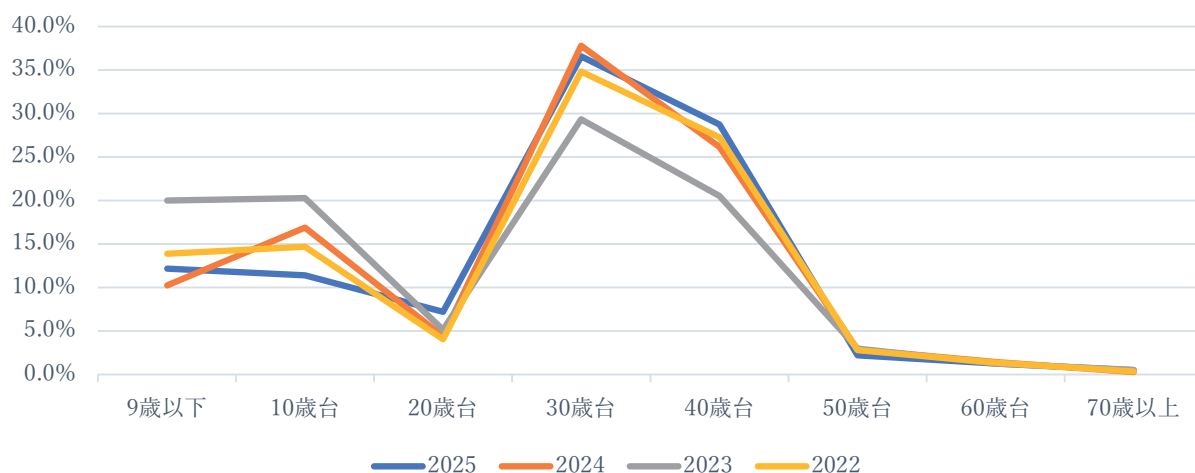


図1-1.2 アンケート回答者の年齢（2022-2025の推移）

出典：アンケート結果より筆者作成。

1-2. 性別

アンケート回答者の性別（図1-2）を見ると、女性が最も多く、全体の約61%を占めている。次いで男

性が約38%となっており、回答者は女性の割合が高い構成である。また、性別を回答しないとした人は約1%とごく少数にとどまっている。

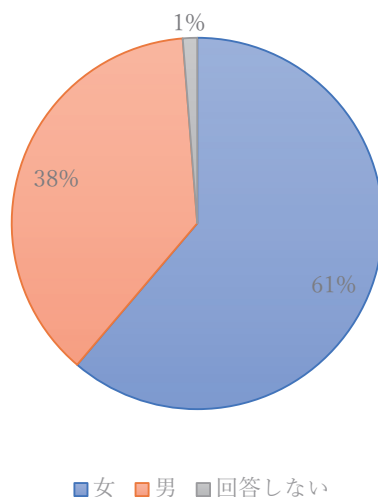


図1-2 アンケート回答者の性別

出典：アンケート結果、茨木市「1歳階級別人口（住民基本台帳）」より筆者作成。

1-3. 職業

アンケート回答者の職業（図1-3.1、図1-3.2）を見ると、最も多かったのは「会社員・公務員」で、全体の約46%を占めている。次いで「学生」が約20%、

「パート・アルバイト」が約15%であった。

なお、本アンケートで使用している「学生」の項目は就学者全体を指す選択肢であり、狭義の大学生などの高等教育機関だけを指すものではない。

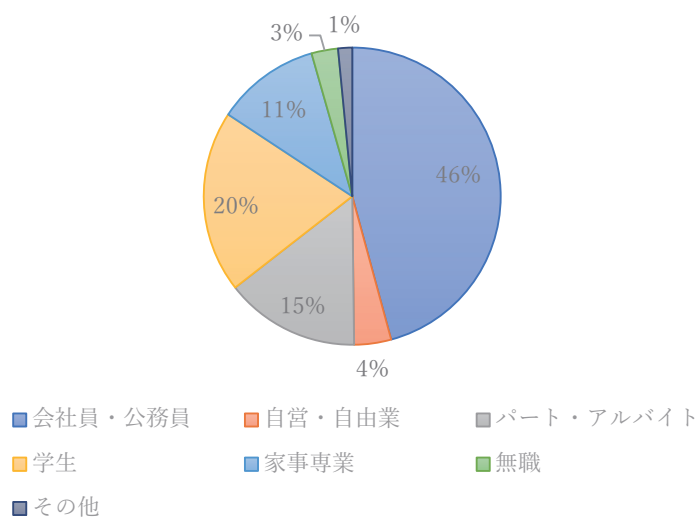


図1-3.1 アンケート回答者の職業

出典：アンケート結果より筆者作成。

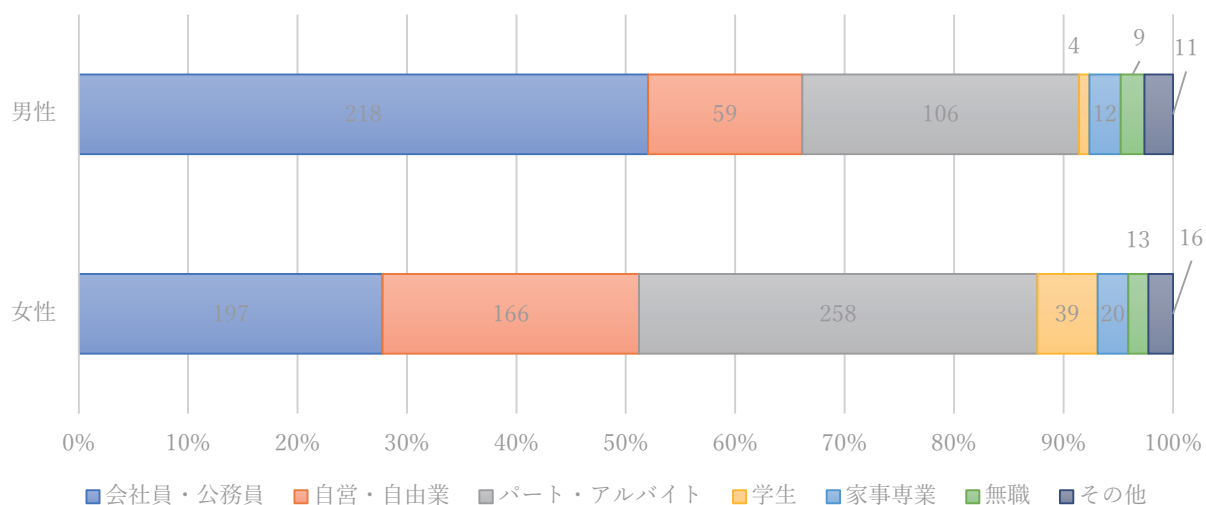


図1-3.2 アンケート回答者の職業（男女別）

出典：アンケート結果より筆者作成。

1-4. 居住地

アンケート回答者の居住地（図1-4.1）を見ると、茨木市内在住者が最も多く、全体の約76%を占めている。一方、市外在住者は約20%であり、一定数の市外からの回答も得られている。また、居住地が不明または無回答の回答者は約4%にとどまっている。茨木市内在住のアンケート回答者の居住地（図1-4.2）を地域ごと（表1）に見ると、東部が最も多く、全体の約23%を占めている。次いで西部が約20%、中央部が

約20%となっており、これら3地域で全体の約6割を占めている。一方、南部は約17%、北部は約14%であり、地域によって回答者数に一定の偏りが見られる（図1-4.3）。なお、居住地域の不明は約6%であった。

次に、市外在住のアンケート回答者の居住地（図1-4.4）を見ると、最も多かったのは高槻市であった。次いで、吹田市、大阪市、箕面市、摂津市、守口市、豊中市といった、茨木市に近い地域からの回答が多く確認された。

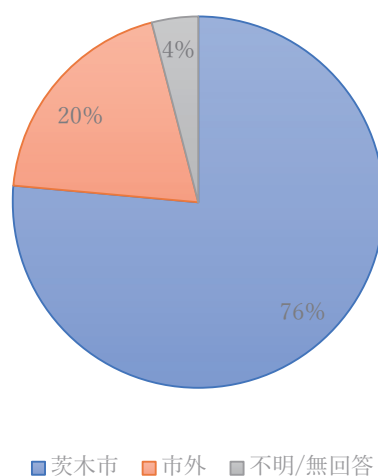
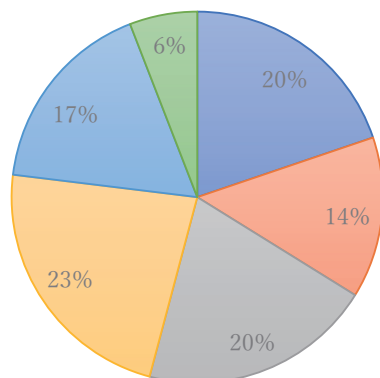


図1-4.1 アンケート回答者の居住地

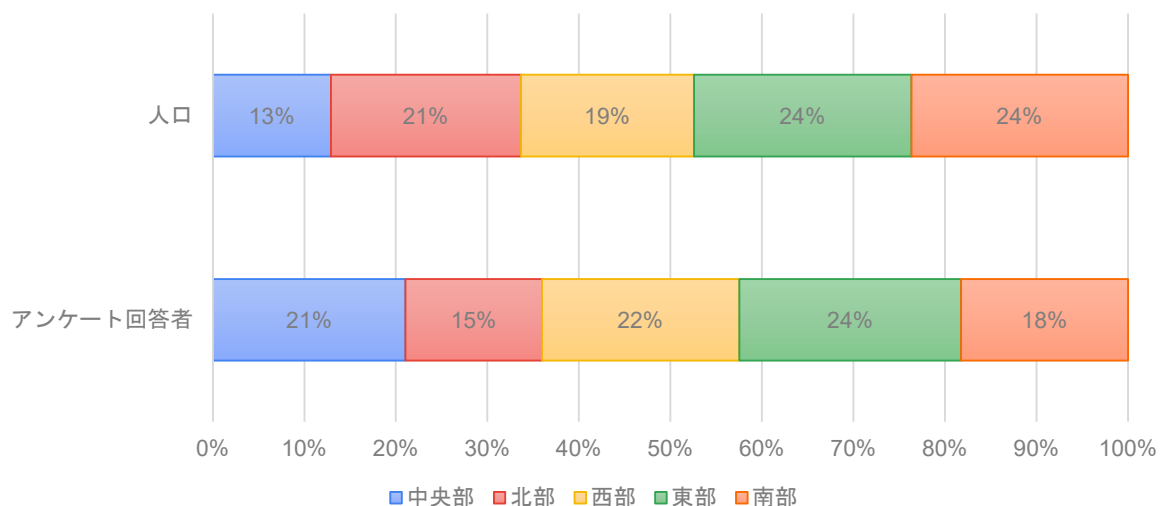
出典：アンケート結果より筆者作成。



■中央部 ■北部 ■西部 ■東部 ■南部 ■不明

図1-4.2 アンケート回答者の居住地（茨木市在住者の地域）

出典：アンケート結果より筆者作成。



■中央部 ■北部 ■西部 ■東部 ■南部

図1-4.3 アンケート回答茨木市在住者の地域と茨木市の地域別人口割合

出典：アンケート結果、茨木市「町丁字別人口・世帯数」より筆者作成。

表1 茨木市の地域分け

中央部	岩倉町、永代町、駅前、大手町、小川町、春日、片桐町、上中条、下中条町、新庄町、新中条町、末広町、西駅前町、西中条町、東中条町、双葉町、舟木町、別院町、本町、宮元町、元町
北部	安威、粟生岩阪、泉原、五日市、五日市緑町、上野町、大岩、太田、太田東芝町、上音羽、上郡、清阪、車作、桑原、彩都あかね、彩都あさぎ、彩都はなだ、彩都もえぎ、彩都やまぶき、佐保、清水、下井町、下音羽、宿久庄、生保、城の前町、銭原、千提寺、大門寺、高田町、十日市町、豊原町、中河原町、長谷、西安威西太田町、西河原北町、西福井、忍頂寺、花園、東安威、東太田、東福井、福井、藤の里、南安威、南耳原、耳原、室山、安元、山手台、山手台新町、山手台東町
西部	井口台、上穂積、上穂東町、北春日丘、郡、郡山、道祖本、紫明園、下穂積、宿川原町、新郡山、豊川、中穂積、西田中町、西豊川町、西穂積町、畑田町、穂積台、松ヶ本町、松下町、見付山、南春日丘、南清水町、美穂ヶ丘
東部	鮎川、主原町、五十鈴町、稲葉町、大池、大住町、学園町、学園南町、上泉町、桑田町、庄、白川、新堂、総持寺、総持寺駅前町、総持寺台、園田町、大同町、竹橋町、田中町、寺田町、東宮町、戸伏町、中総持寺町、中津町、中村町、西河原、橋の内、星見町、三咲町、三島丘、三島町
南部	丑寅、宇野辺、蔵垣内、小柳町、沢良宜西、沢良宜浜、沢良宜東町、島、新和町、大正町、高浜町、玉櫛、玉島、玉島台、玉瀬町、玉水町、天王、並木町、奈良町、野々宮、東宇野辺町、東奈良、東野々宮町、平田、平田台、真砂、真砂玉島台、美沢町、水尾、南目垣、宮島、目垣、横江、若草町、若園町

出典：茨木市産業情報サイトあい・きゃっち「地域分けについて」。

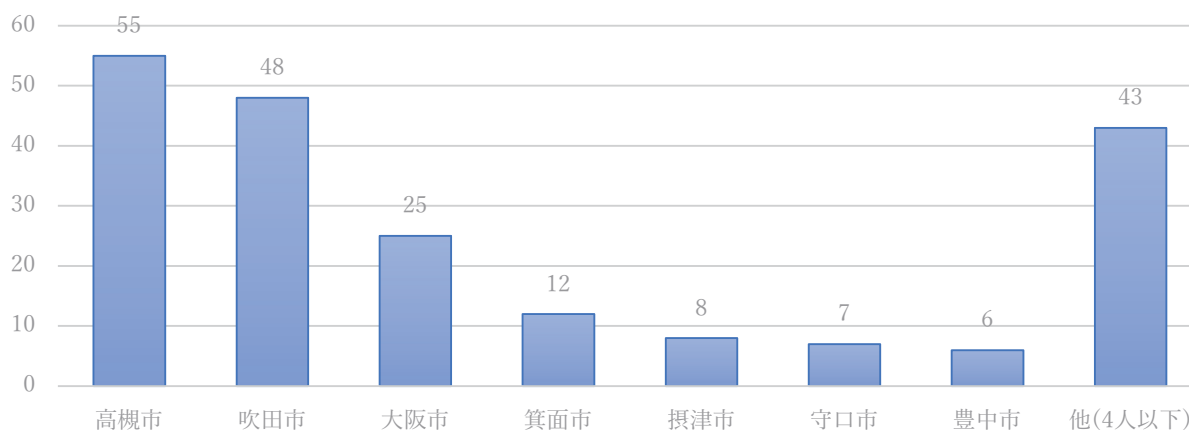


図1-4.4 アンケート回答者の居住地（市外在住者）

出典：アンケート結果より筆者作成。

2. 〈問1〉あなたが茨木市内でよく利用する鉄道（モノレールを含む）の駅はどこですか？（複数回答可）

最も多かったのはJR茨木駅で、全体の約48%の人がよく利用すると回答している。次いで阪急茨木市駅が約36%、JR総持寺駅が約13%、阪急南茨木駅が約11%

となっており、茨木市の中心部にある2駅の利用が中心である（図2-1）。なお、この問1では回答数が多かったJR茨木駅、JR総持寺駅、阪急茨木市駅、阪急南茨木駅、この4駅を中心に見ていくこととする。

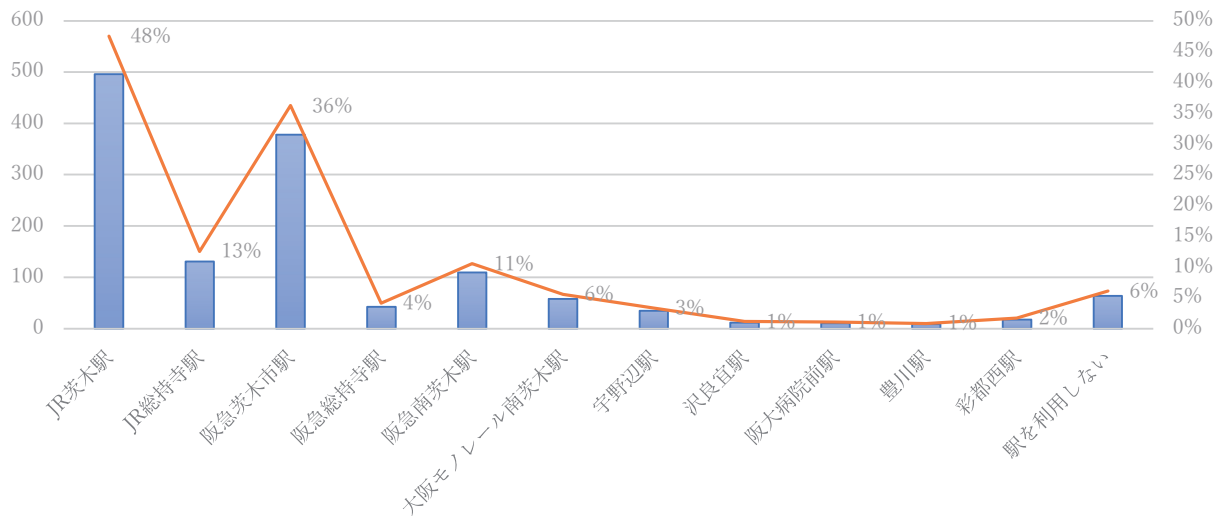


図2-1 よく利用する駅 (全体)

出典：アンケート結果より筆者作成。

・性別

男性・女性ともに全体の結果と同様に中心部の駅（JR茨木駅、阪急茨木市駅など）の利用が中心であるが、男性は女性に比べてJR茨木駅とJR総持寺駅を選択した割合が高かった（図2-2）。ザイマックス不動産総合研究所（2019）の調査によると、平均通勤時間は女性

に比べ男性の方が長いという結果が出ている。今回のアンケートの職業の回答と合わせて考えると、男性は通勤時間が長い（エリアが広がる）影響から乗り換え等で利用するのに利便性が高いJRを利用する割合が高くなっている可能性があると考えられる。

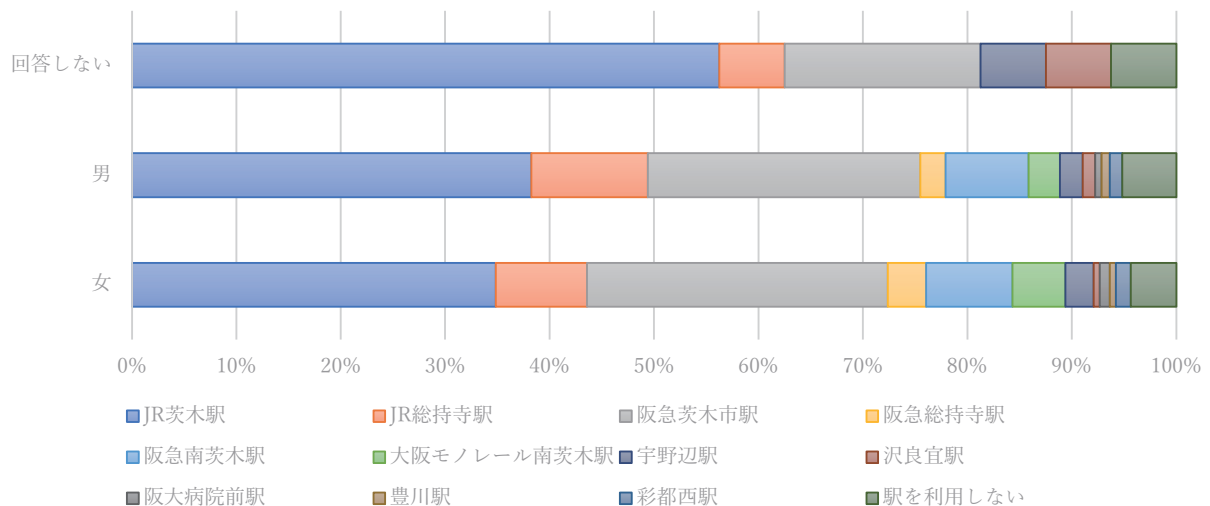


図2-2 よく利用する駅 (性別)

出典：アンケート結果より筆者作成。

・職業

職業別の利用駅の結果（図2-3）では、JR茨木駅の「自営・自由業」と「パート・アルバイト」の割合の低さ、「家事専業」と「無職」の割合の高さ、JR総持寺駅の「自営・自由業」の割合の高さ、「無職」の割合の低さが目立った。

持寺駅の「家事専業」と「無職」の割合の低さ、阪急茨木市駅の「自営・自由業」の割合の高さ、「無職」の割合の低さが目立った。

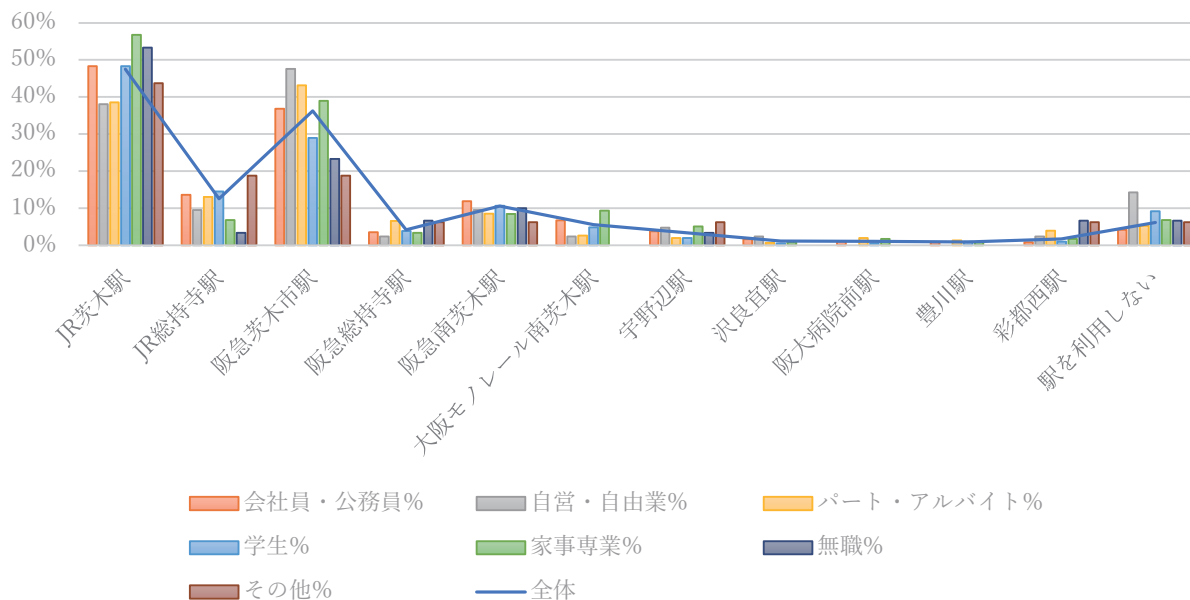


図2-3 よく利用する駅（職業）

出典：アンケート結果より筆者作成。

・年齢

9歳以下から40歳台までは特に大きな違いがあるとは言えないが、その中でも10歳台でJRが比較的多い結

果となっている点は、通学においてJRが選ばれる傾向が高いという可能性がある（図2-4）。

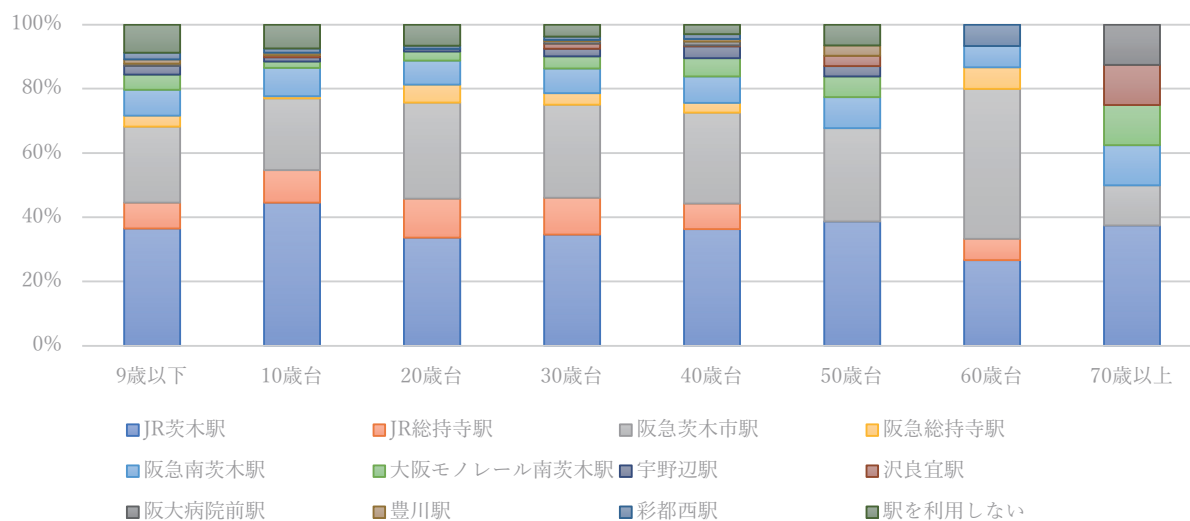


図2-4 よく利用する駅（年齢）

出典：アンケート結果より筆者作成。

・地域

地域別のよく利用する駅（図2-5）では、基本的に居住地から近い駅が選ばれる傾向が高い結果となっているが、北部地域では離れた駅が選ばれる割合が多く、駅までバスや自転車、自家用車といった手段で移

動することが多くなることから、目的地に合わせた駅の選択や、バスの路線、駅周辺の駐車場や駐輪場の環境といったことが影響して利用する駅が選択されている傾向があると思われる。

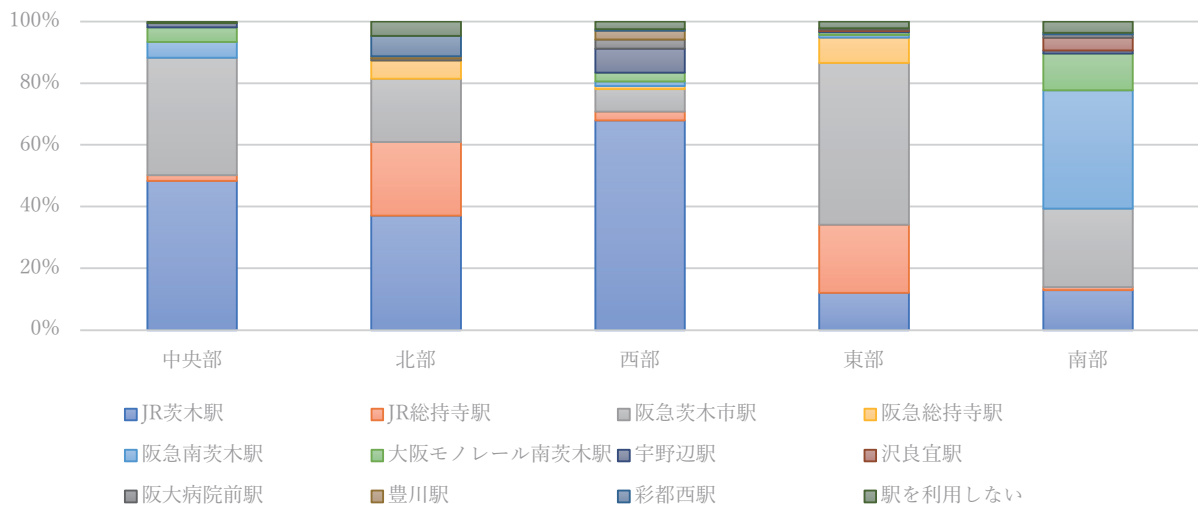


図2-5 よく利用する駅（地域）

出典：アンケート結果より筆者作成。

3. 〈問2〉〈問1〉で回答した駅を利用する頻度はどれくらいですか？

「月に数回」の利用が最も多く、全体の約30%の人が

選択した。次いで「ほぼ毎日」が約26%、「年に数回」が約20%となっており、日常的な利用者が一定数存在している（図3-1）。

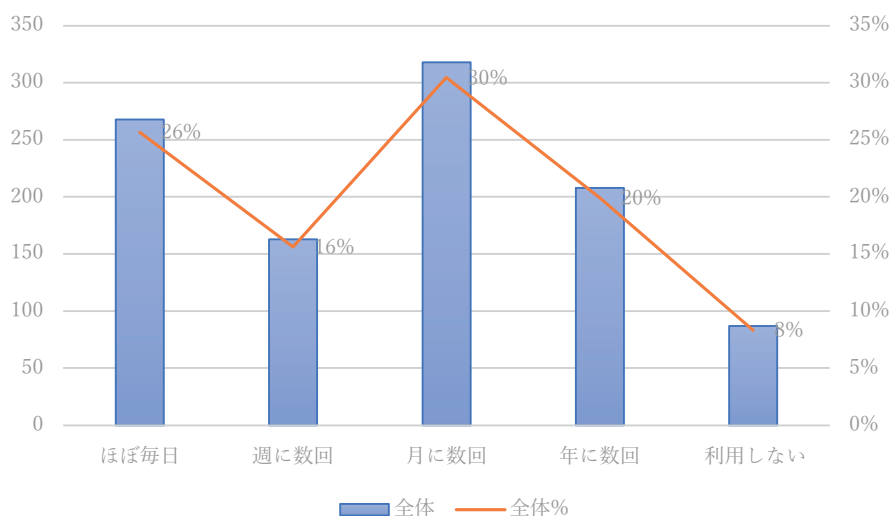


図3-1 駅を利用する頻度（全体）

出典：アンケート結果より筆者作成。

・性別

男性は「ほぼ毎日」、「月に数回」を選択した人が多く、移動手段として駅を頻繁に利用している傾向が出

た。一方、女性は「月に数回」、「年に数回」を選んだ人が比較的多く、利用頻度に男女差があることが表れた（図3-2）。

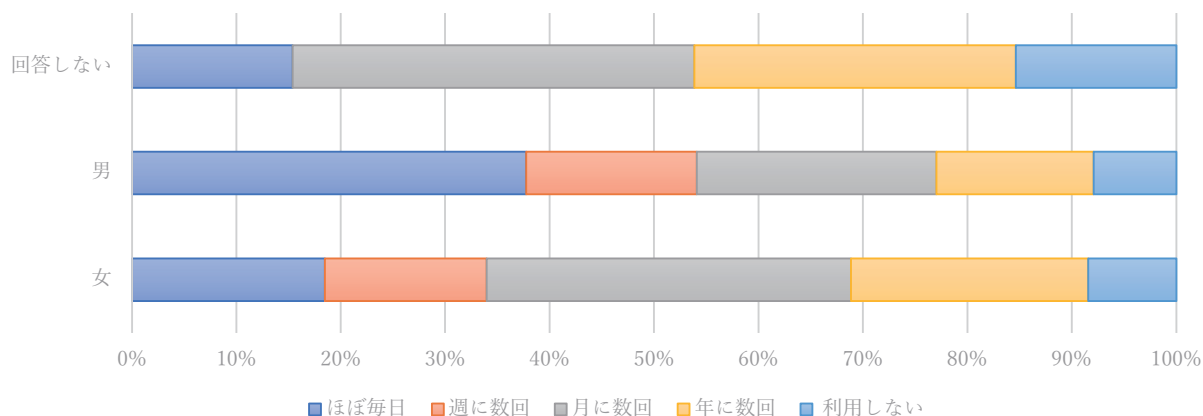


図3-2 駅を利用する頻度（性別）

出典：アンケート結果より筆者作成。

・職業

会社員・公務員は「ほぼ毎日」「月に数回」を選択した人が多く、鉄道・モノレールを利用して通勤している割合の高いことが表れている。一方、家事専業とパー

ト・アルバイトは利用頻度が少なく、居住地から近いエリアでの買い物や就業先を選んでいる人が多いということが考えられる（図3-3）。

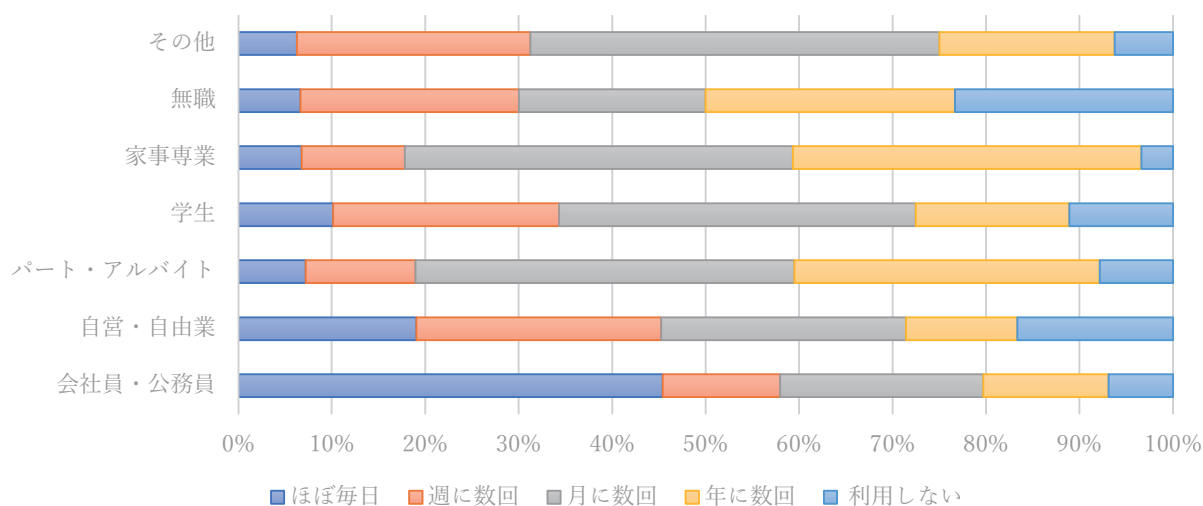


図3-3 駅を利用する頻度（職業）

出典：アンケート結果より筆者作成。

・年齢

年齢別では、ばらつきはあるものの全体として年齢が上がるにつれ駅を利用する頻度が高くなる傾向がみ

られた。その中でも特に10歳台と20歳台の差が顕著であり、日常的な行動範囲がこの年代を境に広がることが表れた結果といえよう（図3-4）。

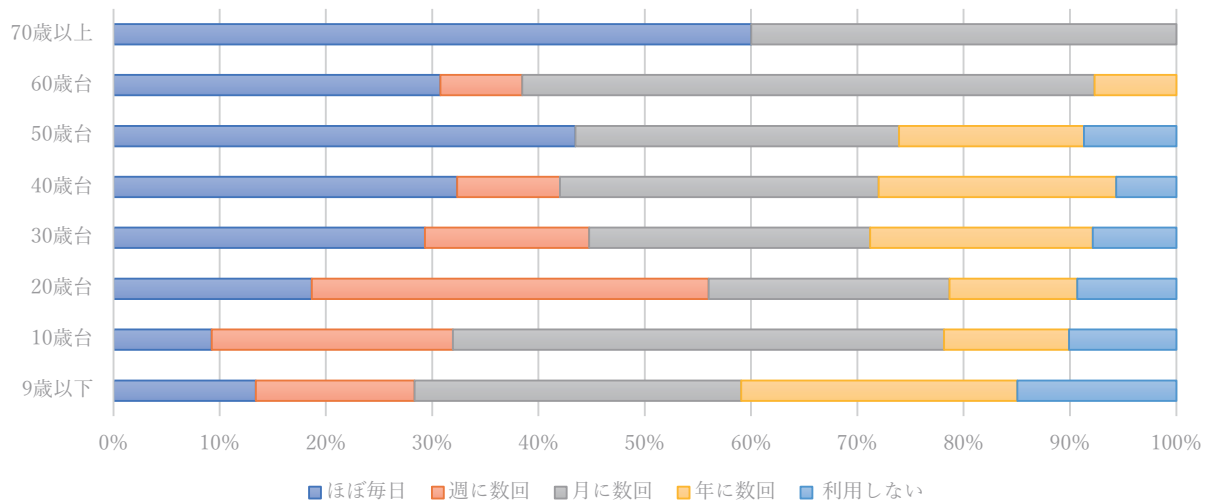


図3-4 駅を利用する頻度（年齢）

出典：アンケート結果より筆者作成。

・地域

地域別の結果では、中央部と東部の利用頻度の高さが出ている。一方、北部の利用は他の地域に比べ利用

頻度が低く、「利用しない」を選択した割合も高いことから、居住地と駅との距離が影響を与えた結果であると言える（図3-5）。

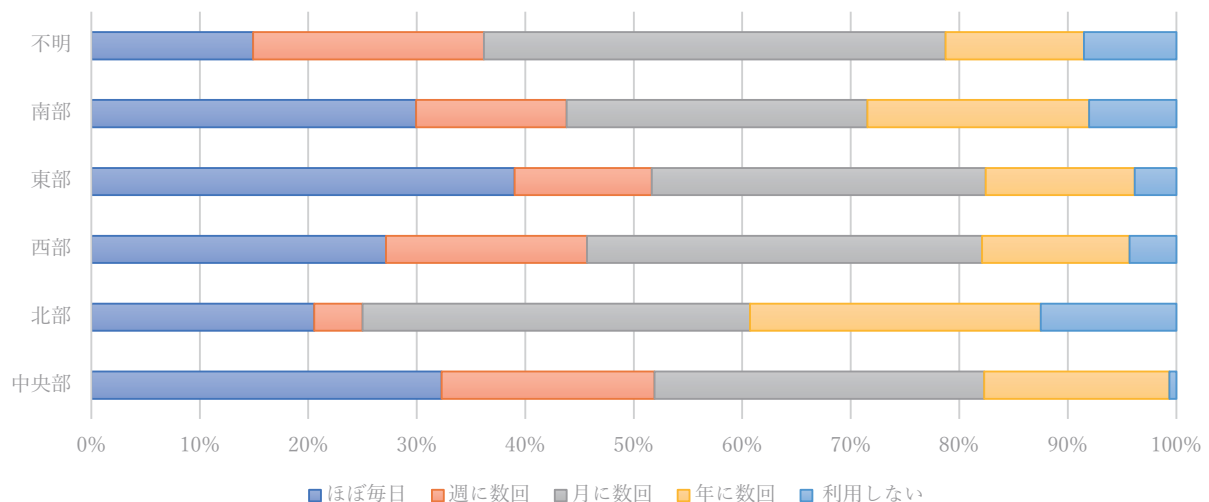


図3-5 駅を利用する頻度（地域）

出典：アンケート結果より筆者作成。

4. 〈問3〉〈問1〉で回答した駅を利用する目的は何ですか？（複数回答可）

最も多かったのは「通勤・通学」で約40%の人が選択した。次いで「市外への移動」が約35%、「市内への

移動」が約22%となっており、就業・就学と日常的な買い物等の生活行動の双方で駅が重要な役割を果たしていることがうかがえる（図4-1）。

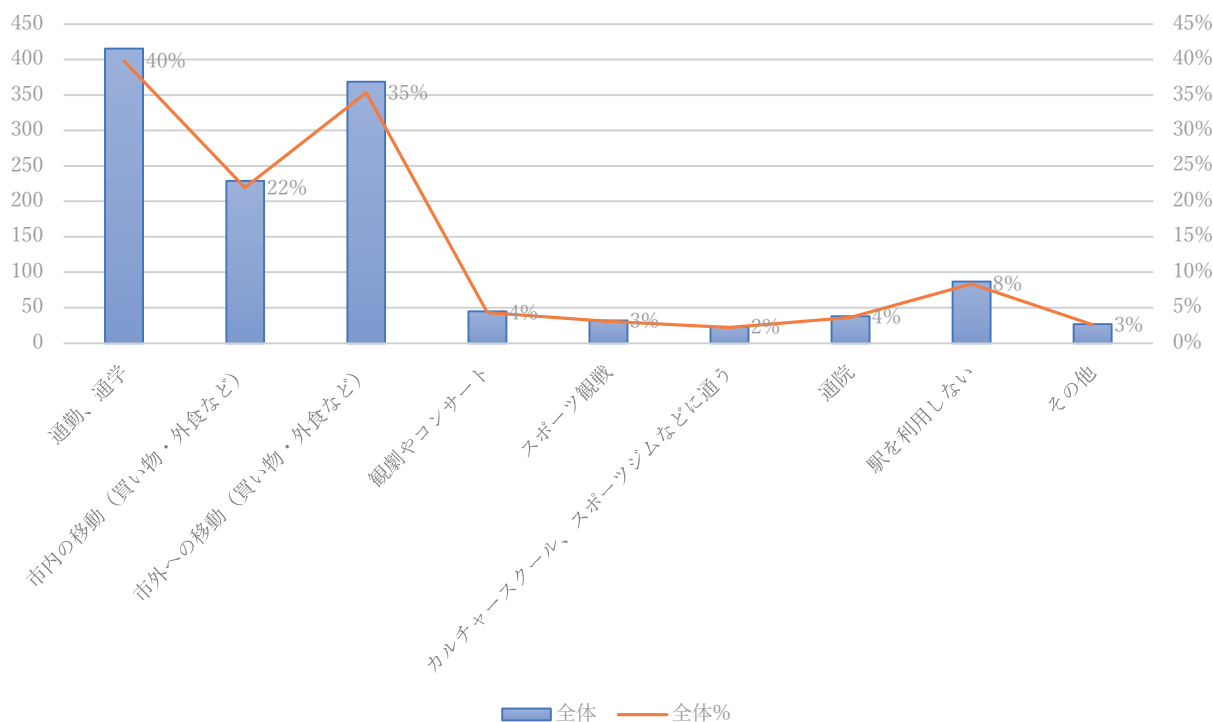


図4-1 駅を利用する目的 (全体)

出典：アンケート結果より筆者作成。

・性別

男性は「通勤・通学」の割合が高く、就業行動に直結した利用が中心である。これに対し女性は「買い物」

の割合が相対的に高く、日常生活の一部として駅を利用している人が多いことがうかがえる（図4-2）。

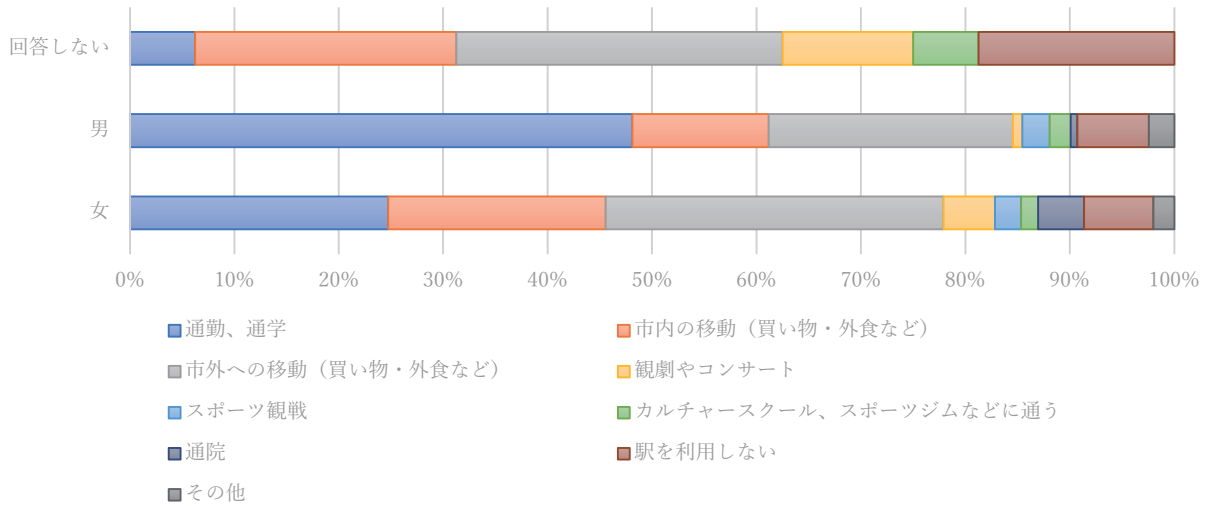


図4-2 駅を利用する目的（性別）

出典：アンケート結果より筆者作成。

・職業

職業別の結果（図4-3）では、会社員・公務員で「通勤、通学」を選んだ人が半数を超えた。学生は「通学」

に加え、「買い物」などで駅を利用する目的が多様であるという結果になった。

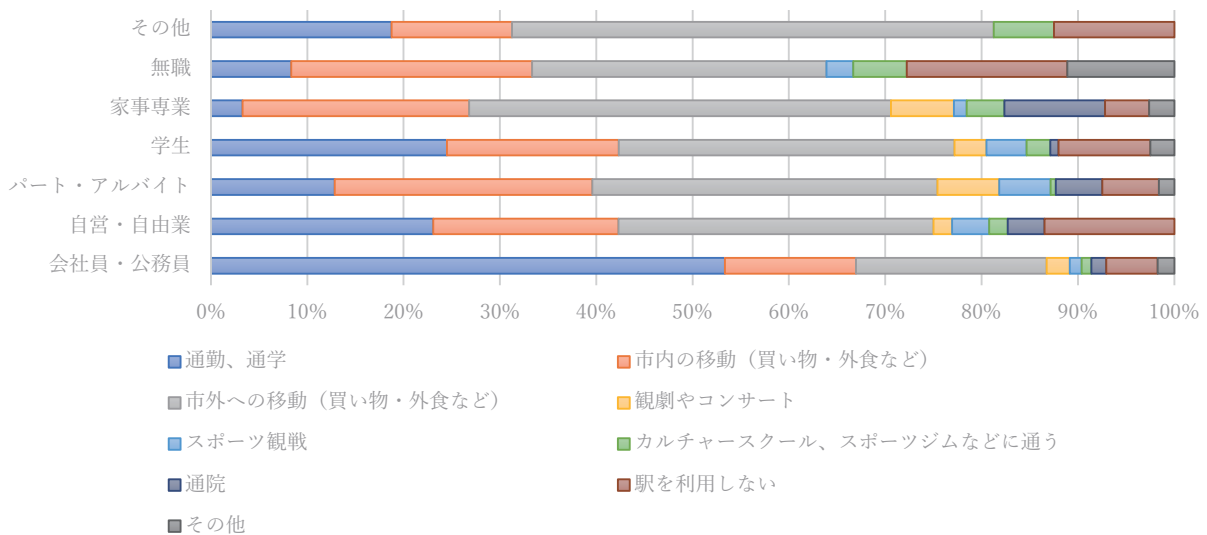


図4-3 駅を利用する目的（職業）

出典：アンケート結果より筆者作成。

・年齢

年齢別（図4-4）では、「通勤、通学」、「市内の移動」、「市外への移動」の結果において、9歳以下と10歳台、そして、20歳台から50歳台まででそれぞれ同じ傾向が出ている。その他、注目したのが「カルチャースクール、スポーツジムなどに通う」の選択である。

9歳以下と10歳台は学習塾などの利用が考えられる。20歳台から50歳台までは仕事の多忙さからか習い事等の機会が減少し、60歳台以上は仕事をする人の割合が減少することから、再び習い事等の機会が増えてくるというような流れが回答結果に表れているように考えられる。

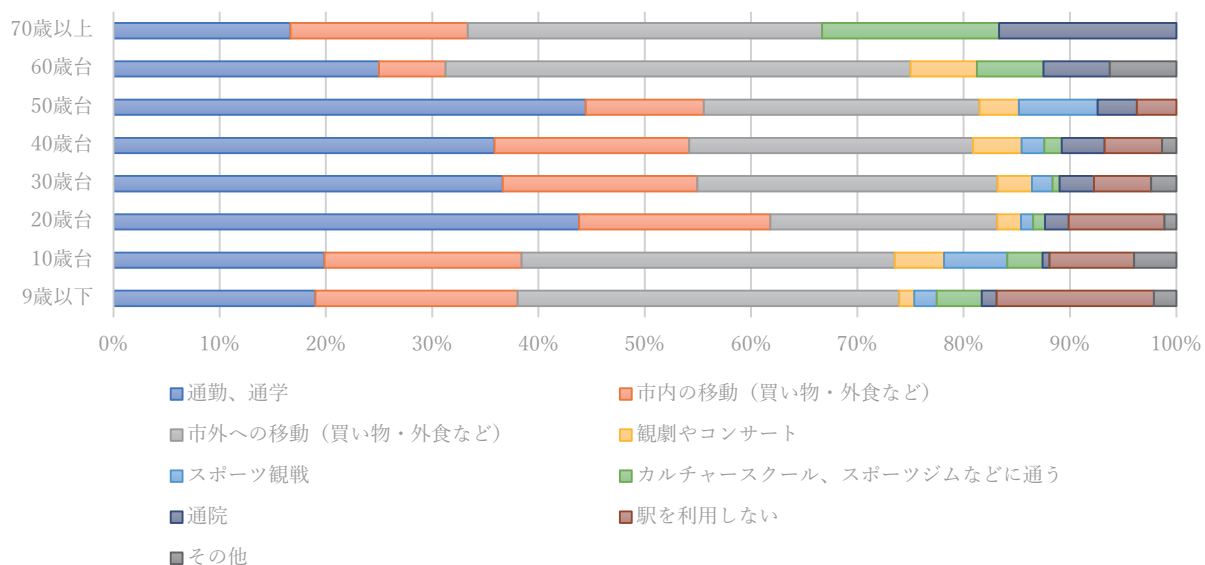


図4-4 駅を利用する目的（年齢）

出典：アンケート結果より筆者作成。

・地域

地域別の結果（図4-5）では、北部が「通勤・通学」で他の地域と比べて割合が低く、「駅を利用しない」で割合が高かった。一方、中央部は「駅を利用しない」

を選択した人が非常に少なく、市内外への移動手段として駅を利用している状況が表れており、居住地周辺の公共交通機関のインフラ環境が駅の利用に影響していることがうかがえる。

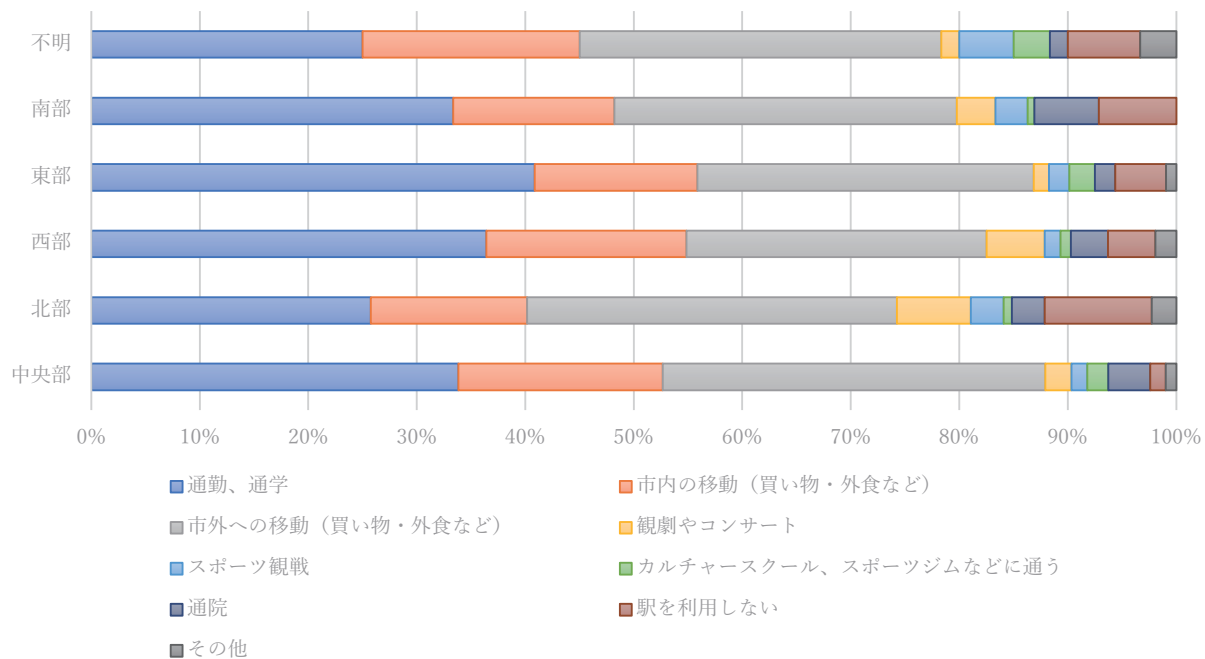


図4-5 駅を利用する目的（地域）

出典：アンケート結果より筆者作成。

5. 〈問4〉〈問1〉で回答した駅周辺に不足している と思う施設・お店は何ですか？（複数回答可）

※〈問1〉で「⑫ 駅を利用しない」を選択した方は最寄り駅（茨木市外の方で「⑫ 駅を利用しない」を選択した方は茨木市内でよく訪れる地域）に不足していると思う施設・お店をご回答くだ

さい。

「駐車・駐輪場」が最も多く、全体の約33%の人が選択した。次いで「カフェ・レストラン」が約29%、「スーパー」が約21%、「コンビニ」が約15%となっている（図5-1）。

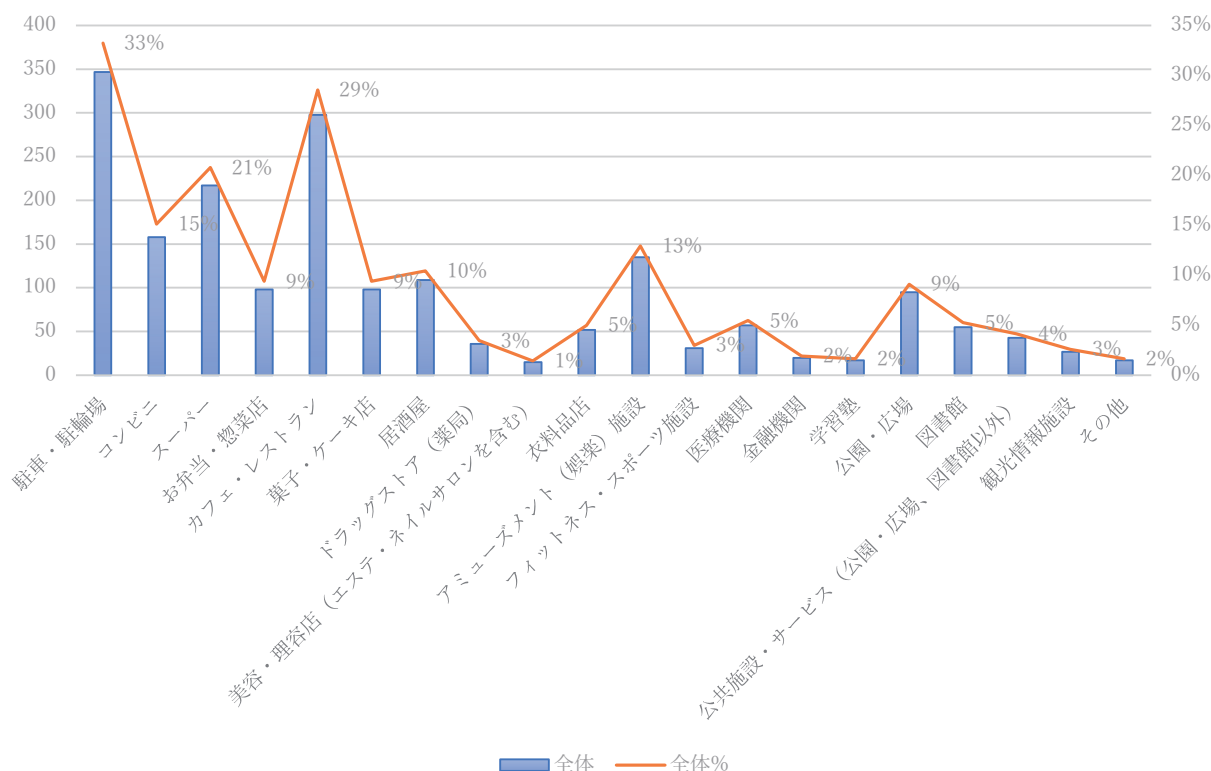


図5-1 駅周辺に不足していると思う施設・お店（全体）

出典：アンケート結果より筆者作成。

・性別

性別の結果（図5-2）をみると、3%以上の差があった選択肢が「駐車場・駐輪場」、「菓子・ケーキ店」、「居酒屋」、「衣料品店」、「アミューズメント（娯楽）施設」、

「フィットネス・スポーツ施設」の6つで、最も差があったのが「居酒屋」で、男性は17%、女性は7%であった。

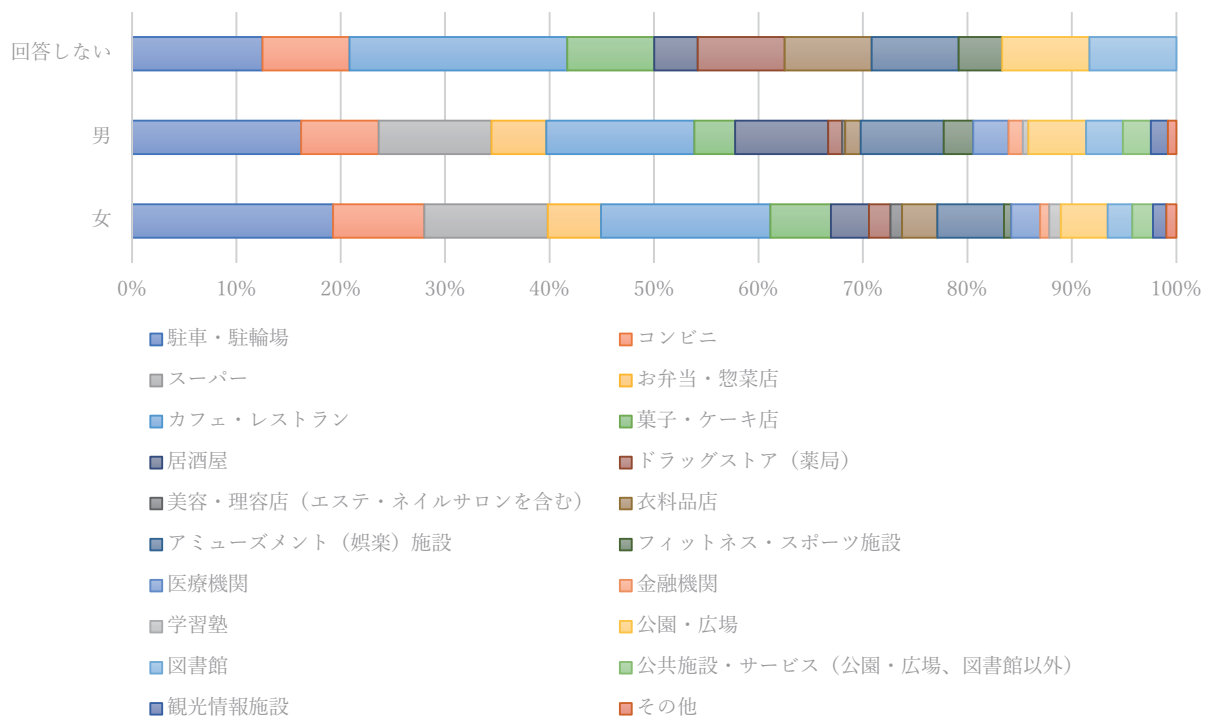


図5-2 駅周辺に不足していると思う施設・お店（性別）

出典：アンケート結果より筆者作成。

・職業

職業別の結果（図5-3）では、学生の「コンビニ」の多さと「お弁当・惣菜店」の少なさが目立ち、経済性よりも利便性が高い施設・お店が優先されていることが表れているように見える。また、女性の割合が多

いパート・アルバイトと家事専業、そして会社員・公務員といった人では、「スーパー」を選択した人の割合が比較的高く、経済性の優先度が高いように見受けられる。

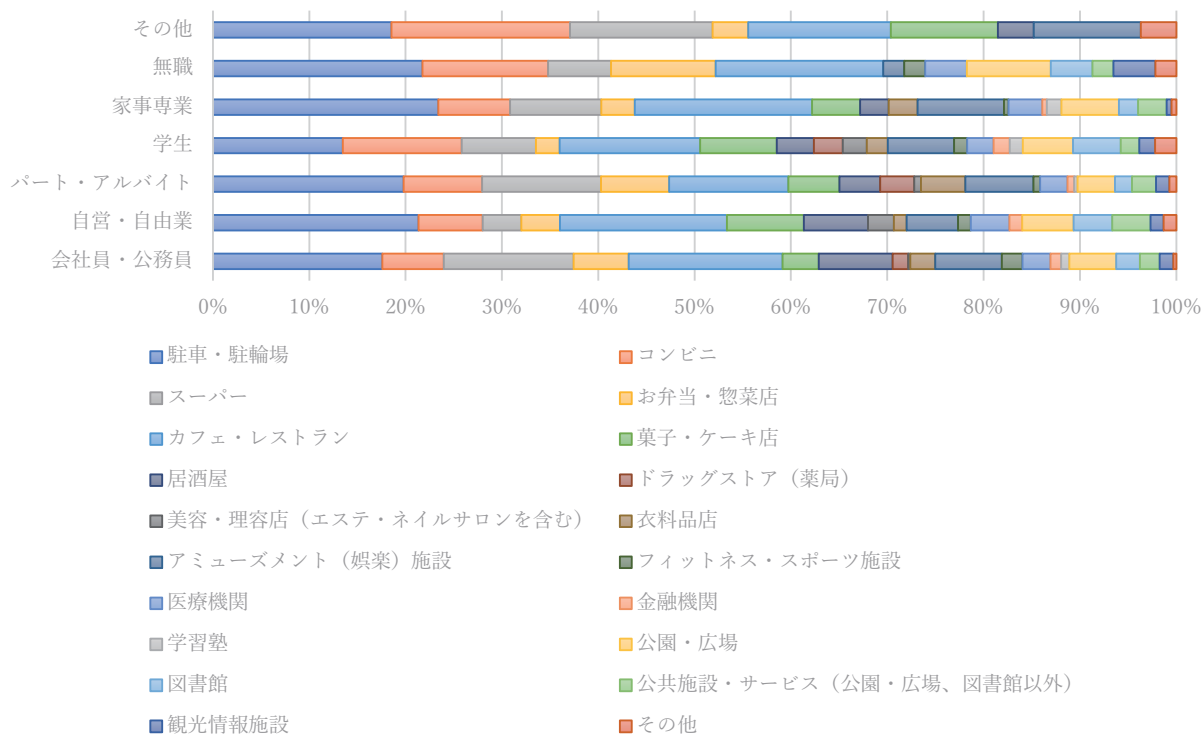


図5-3 駅周辺に不足していると思う施設・お店（職業）

出典：アンケート結果より筆者作成。

・年齢

年齢別の結果（図5-4）では、職業別の結果のところで述べた経済性と利便性の優先度の違いが表れているという可能性がここでも出ている。10歳台以下の

若年層では「コンビニ」を選択した割合が高く、20歳台から40歳台の働き盛りの世代では「コンビニ」の割合が比較的低い結果となっている。

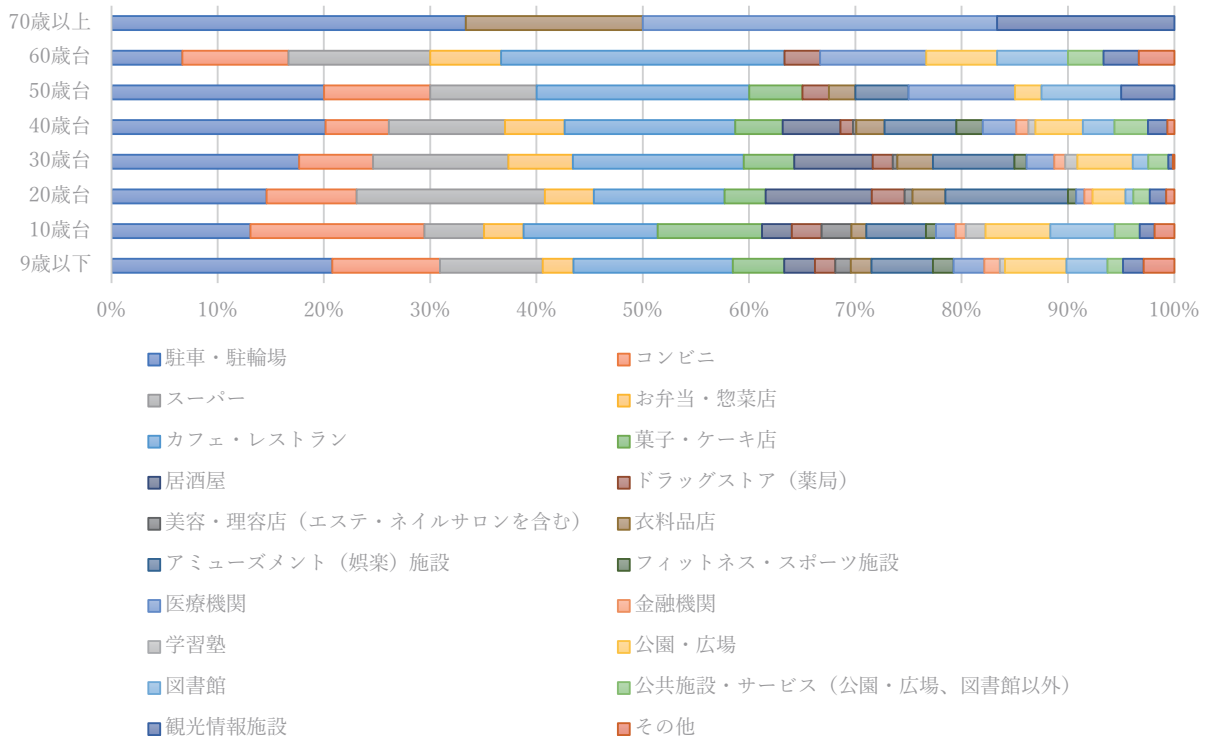


図5-4 駅周辺に不足していると思う施設・お店（年齢）

出典：アンケート結果より筆者作成。

・地域

地域別の結果（図5-5）では、北部が「駐車・駐輪場」を選択した割合が他地域に比べ高いことが目立

つ。北部は移動手段として車を利用する割合が高く（図8-5）、利用者の環境によって駅周辺に不足していると感じるものに差が出ていることが考えられる。

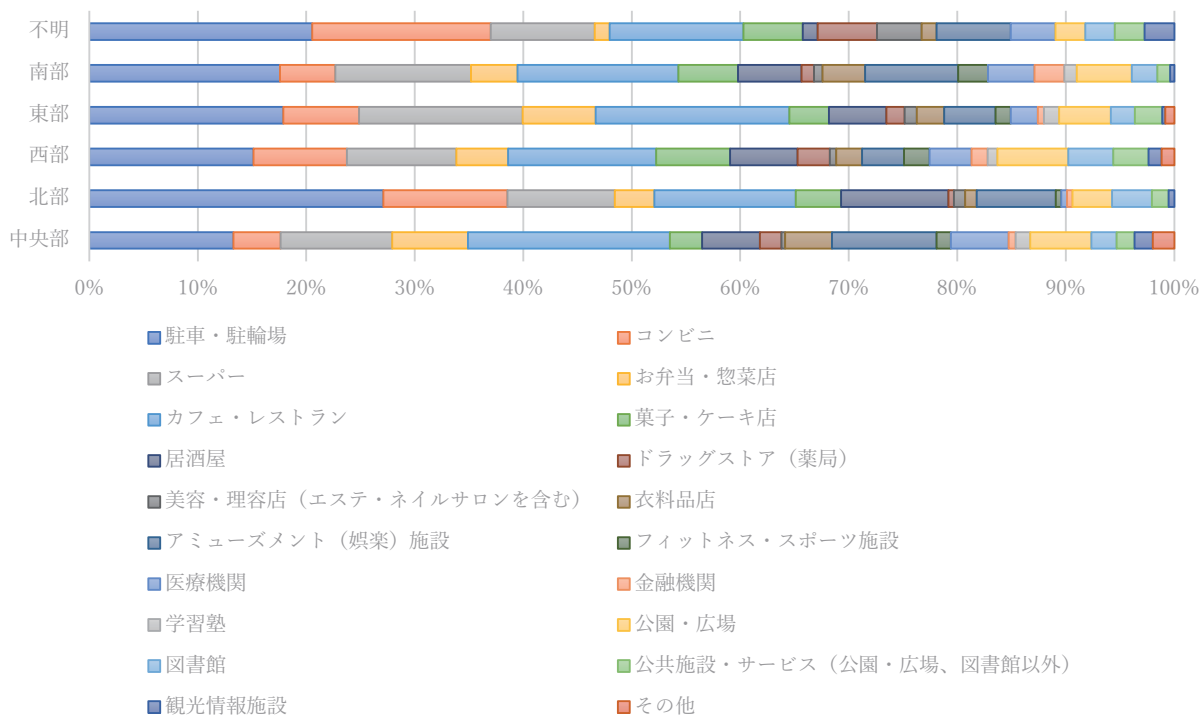


図5-5 駅周辺に不足していると思う施設・お店（地域）

出典：アンケート結果より筆者作成。

6. 〈問5〉阪急茨木市駅西口の駅前広場に特に必要だ
と思う施設は何ですか？（最大3つまで）

最も多かったのは「ゆったり過ごせる芝生エリア」
で、全体の約44%の人が選択した。次いで「多目的イ

ベント広場」が約21%、「子どもが遊べる遊具」が約
18%、「一般車の送迎スペース」が約17%、「木陰（日陰）
のある休憩スペース」が約16%であった（図6-1）。

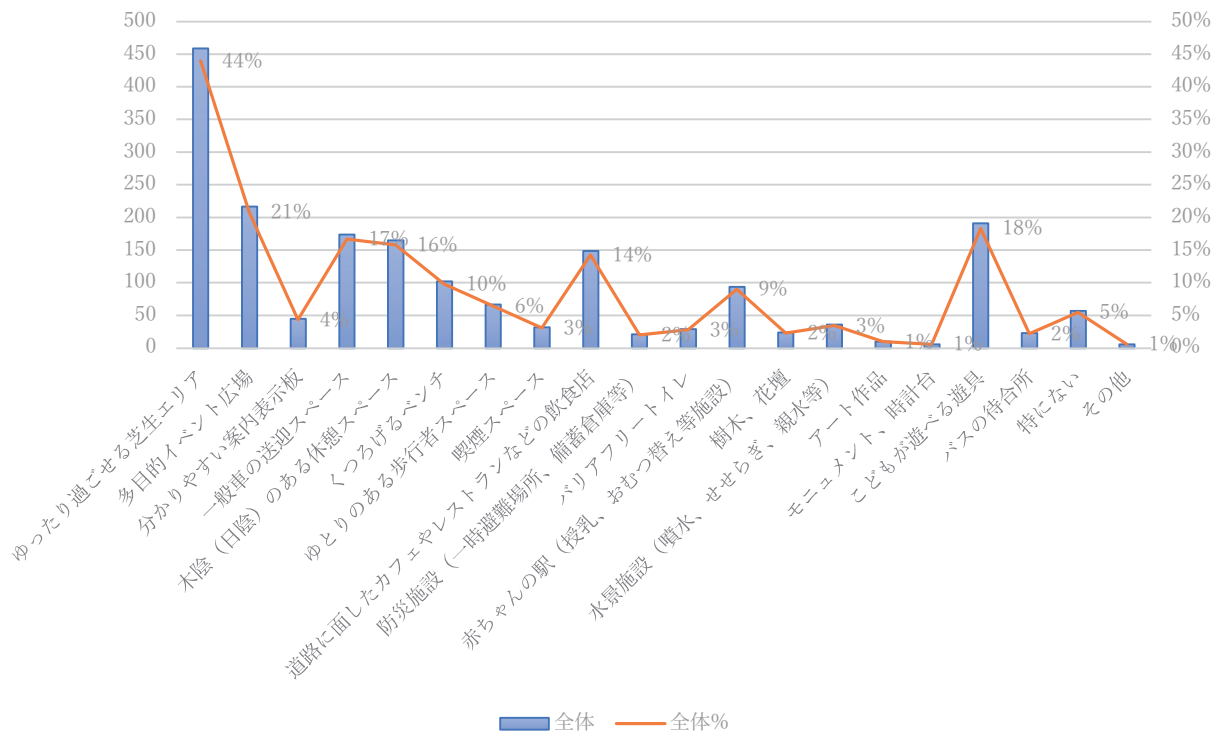


図6-1 阪急茨木市駅西口の駅前広場に必要だと思う施設（全体）

出典：アンケート結果より筆者作成。

・性別

性別の結果（図6-2）では、「多目的イベント広場」の選択が最も差が大きく、男性が約8%多く選択した。

次に差が大きかったのが「子どもが遊べる遊具」で女性が男性に比べ約7%多く、「ゆとりのある歩行者スペース」で女性が男性に比べ約6%多く選択した。

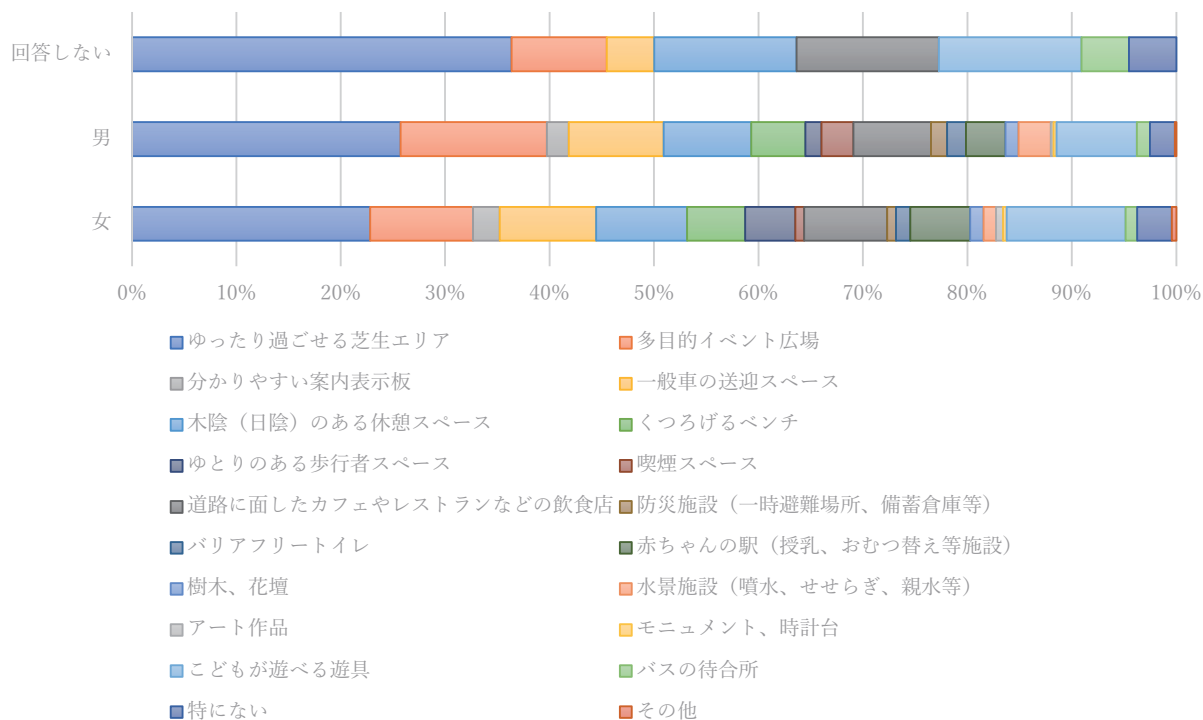


図6-2 阪急茨木市駅西口の駅前広場に必要だと思う施設（性別）

出典：アンケート結果より筆者作成。

・職業

職業別の結果（図6-3）では、学生が「多目的イベント広場」と「子どもが遊べる遊具」の選択が少ないなど、比較的他の職業とは異なる傾向が出ている。この点については、次の年齢別の結果と合わせてみる

ことで、その傾向を確認することができるため、次項であらためて述べることにする。その他では、家事専業が「子どもが遊べる遊具」を選択する人が多いところが目立った。

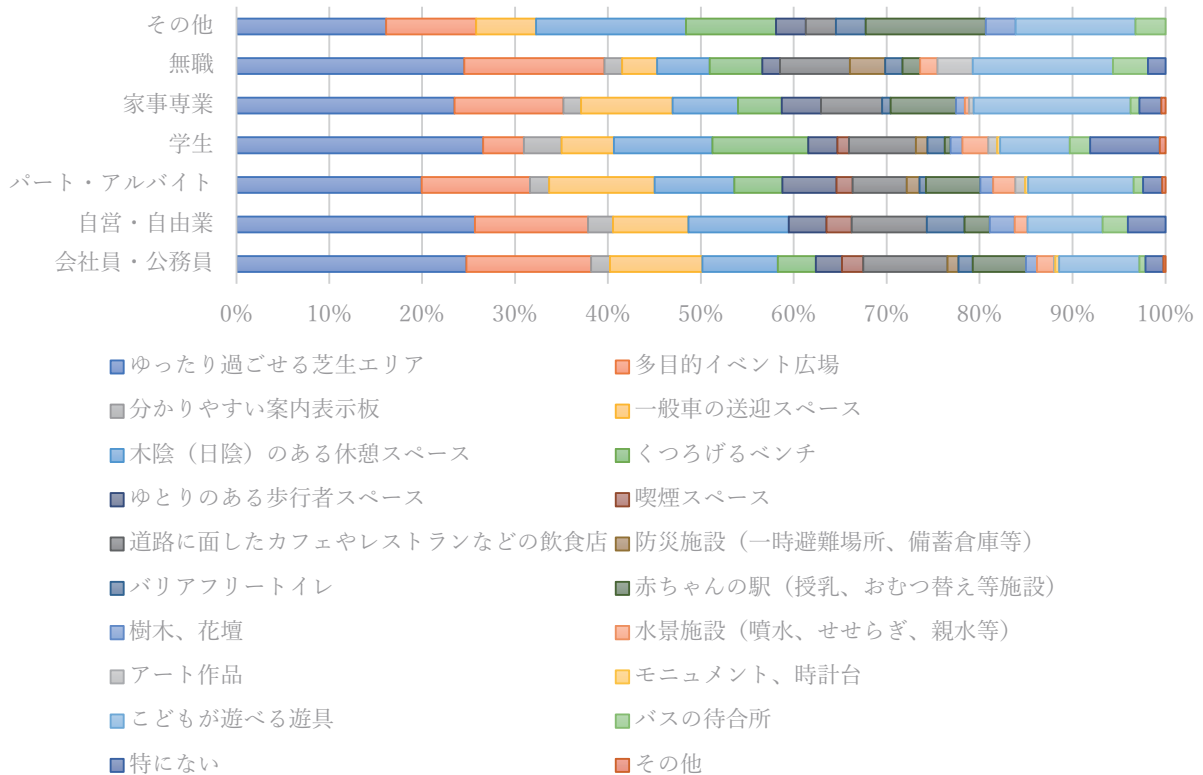


図6-3 阪急茨木市駅西口の駅前広場に必要だと思う施設（職業）

出典：アンケート結果より筆者作成。

・年齢

年齢別の結果（図6-4）では、特に10歳台が他の年代と比べて異なった結果となった。この結果については、先述の学生の傾向と同様であり、「多目的イベント広場」と「子どもが遊べる遊具」の選択が少ない。

また、9歳以下で「子どもが遊べる遊具」を選択する割合が多いことから、若年層では個人にとって必要なものを選択する傾向が他の年代に比べて多いように見受けられる。

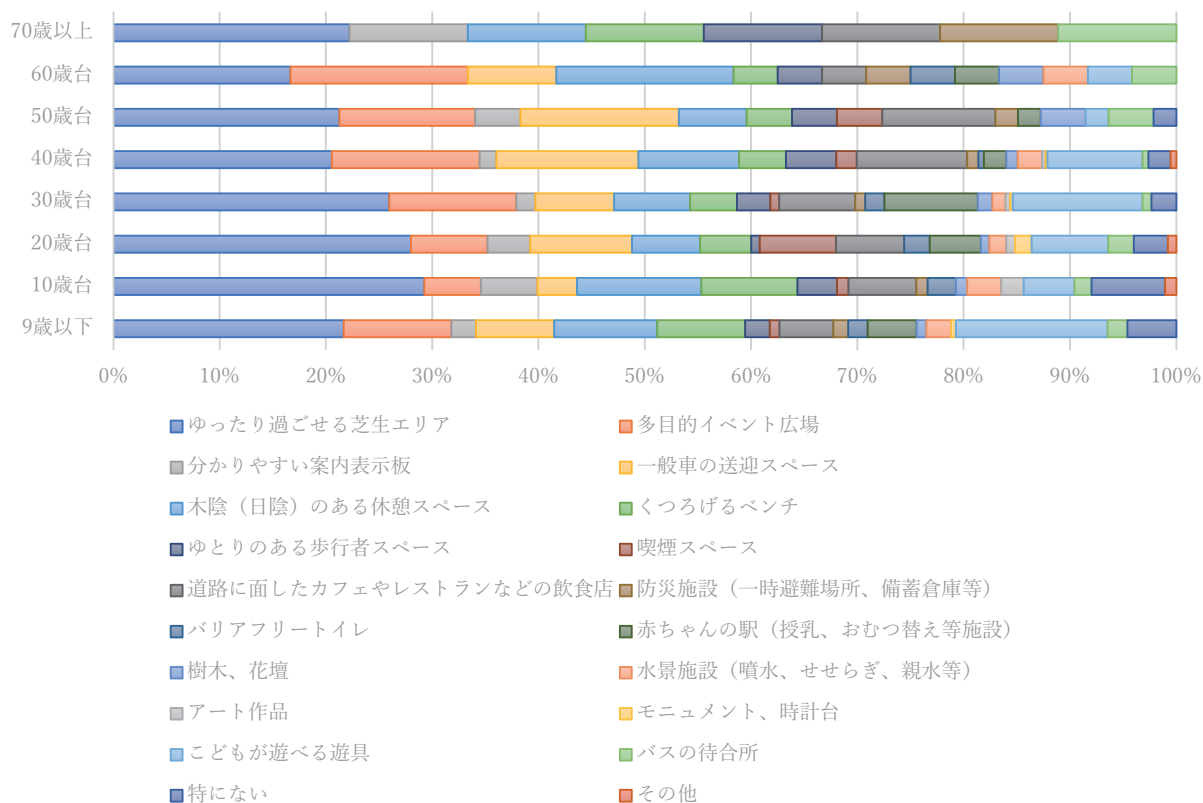


図6-4 阪急茨木市駅西口の駅前広場に必要だと思う施設（年齢）

出典：アンケート結果より筆者作成。

・地域

地域ごとの結果（図6-5）では、西部で「ゆったり過ごせる芝生エリア」と「多目的イベント広場」を選択する人が多かった。また、北部は「一般車の送迎

スペース」の選択が他の地域と比較して多い結果となっているところは、自動車で送迎する機会が他の地域よりも多いことが要因である可能性が高いと考えられる。

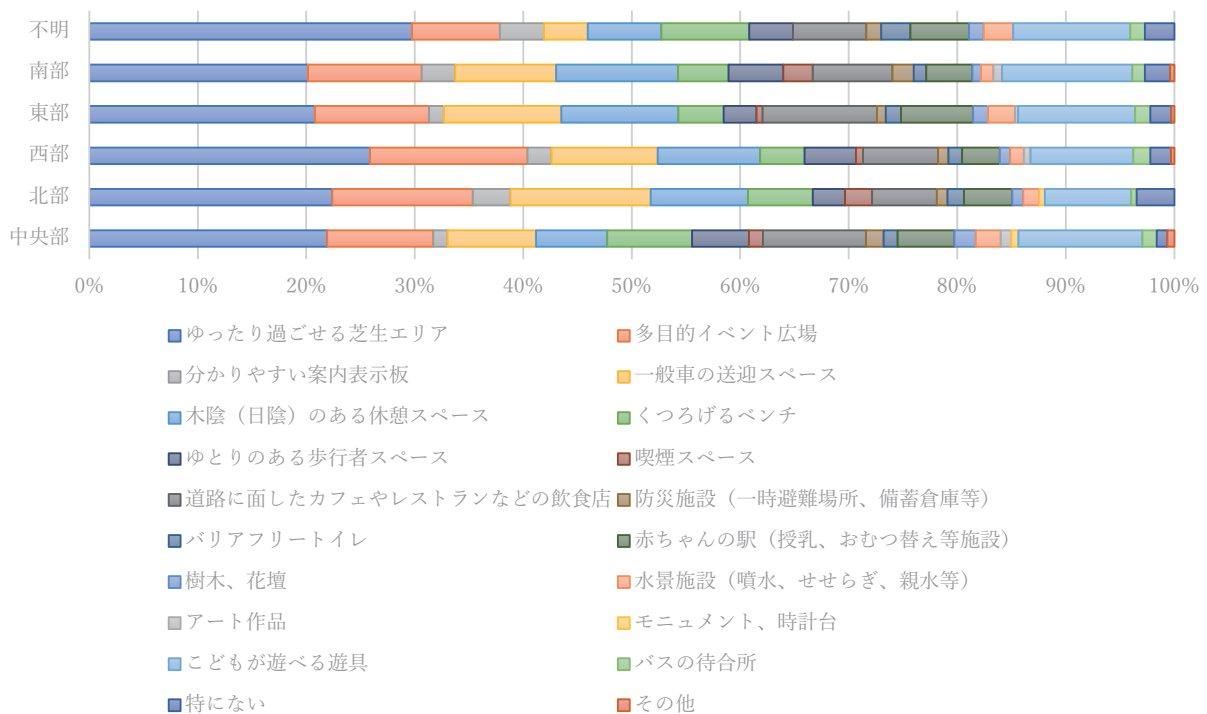


図6-5 阪急茨木市駅西口の駅前広場に必要だと思う施設（地域）

出典：アンケート結果より筆者作成。

7. 〈問6〉JR茨木駅西口の駅前広場に特に必要だと思う施設は何ですか？（最大3つまで）

最も多かったのは「ゆったり過ごせる芝生エリア」で、全体の約39%の人が選択した。次いで「多目的イベント広場」、「こどもが遊べる遊具」の2つが約

17%、「一般車の送迎スペース」が約16%となっている（図7-1.1）。阪急茨木市駅の結果との比較（図7-1.2）では、全体としては同じような結果になっているが、その中でも差が少し出ていたのが「ゆったり過ごせる芝生エリア」と「多目的イベント広場」の2つであった。

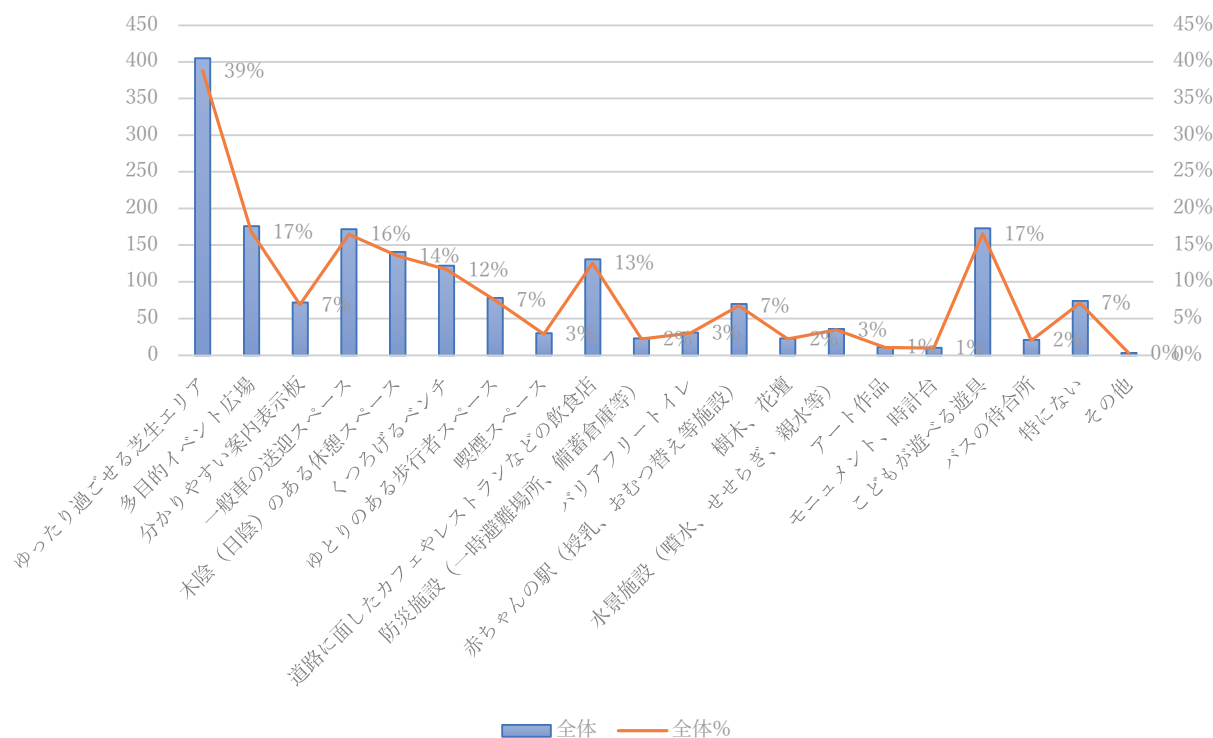


図7-1.1 JR茨木駅西口の駅前広場に必要だと思う施設(全体)

出典：アンケート結果より筆者作成。

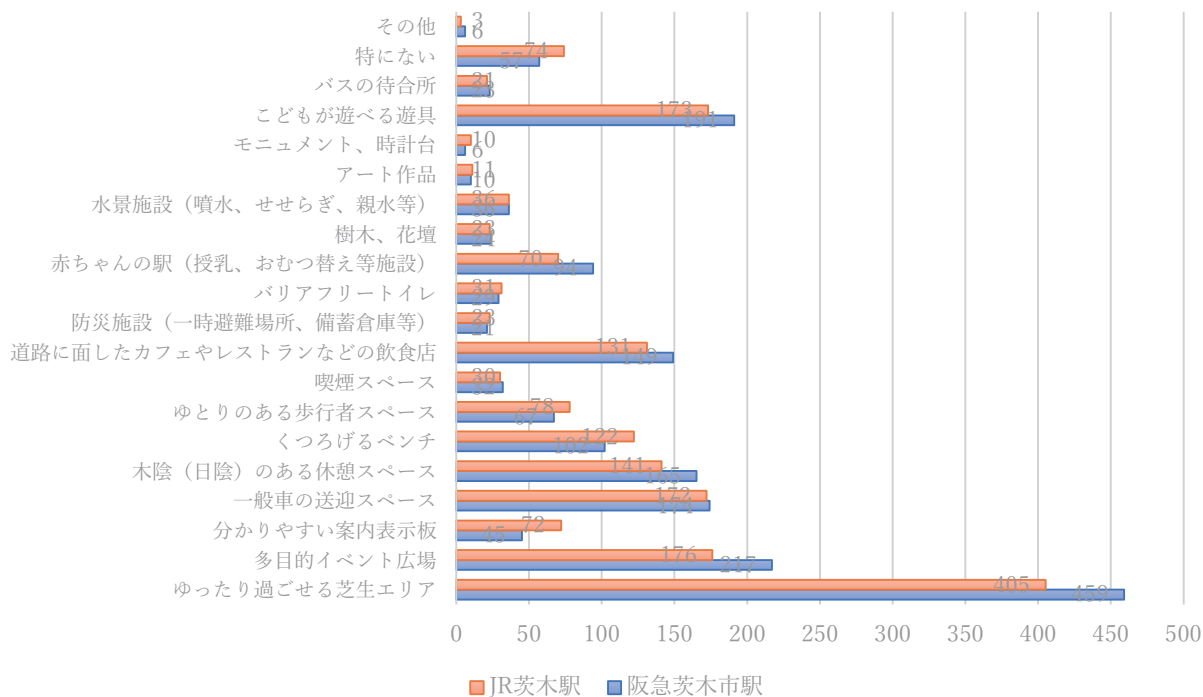


図7-1.2 JR茨木駅西口の駅前広場に必要だと思う施設(阪急茨木市駅との比較)

出典：アンケート結果より筆者作成。

・性別

性別の結果（図7-2）では、「ゆったり過ごせる芝生エリア」と「多目的イベント広場」の選択が最も差

が大きく、ともに男性が約5%多く選択した。阪急茨木市駅西口の結果に比べて男女の差があまりなく、全体に近い結果となった。

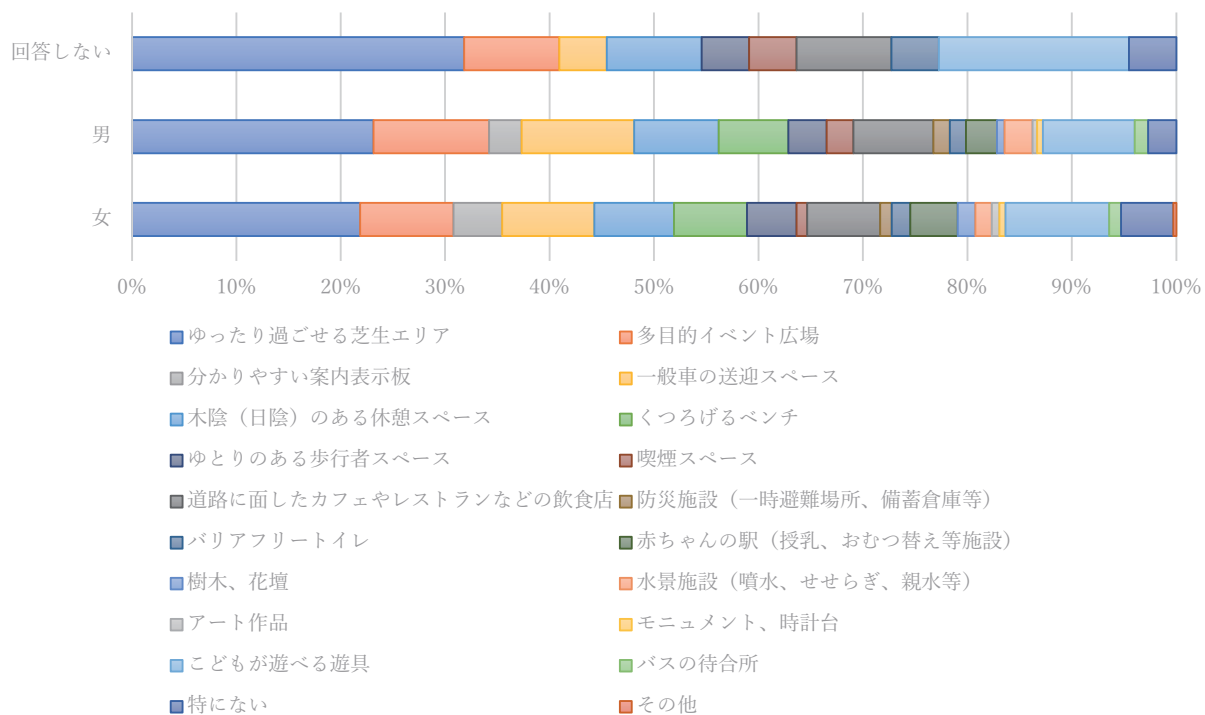


図7-2 JR茨木駅西口の駅前広場に必要だと思う施設（性別）

出典：アンケート結果より筆者作成。

・職業
職業別の結果（図7-3）では、特に全体の結果と

比べて大きく異なる点は確認できなかった。また、阪急茨木市駅との比較でも特筆すべき点はなかった。

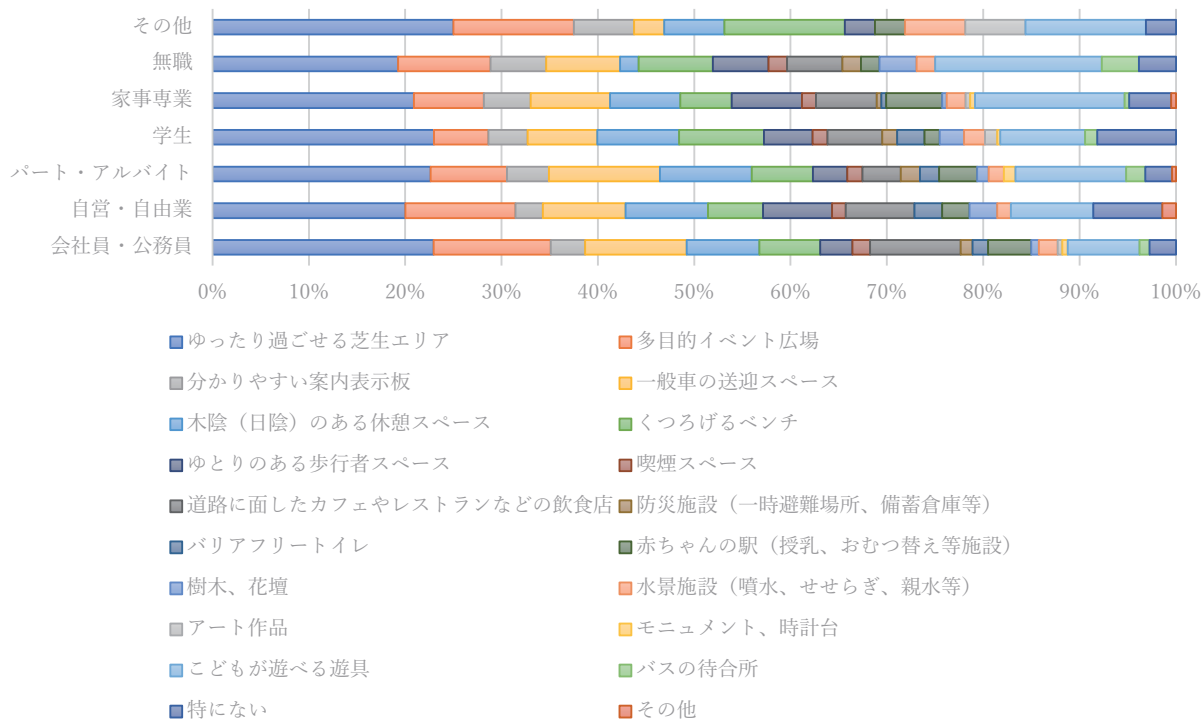


図7-3 JR茨木駅西口の駅前広場に必要だと思う施設（職業）

出典：アンケート結果より筆者作成。

・年齢

年齢別の結果（図7-4）では、特に全体の結果と

比べて大きく異なる点は確認できなかった。また、阪急茨木市駅との比較でも特筆すべき点はなかった。

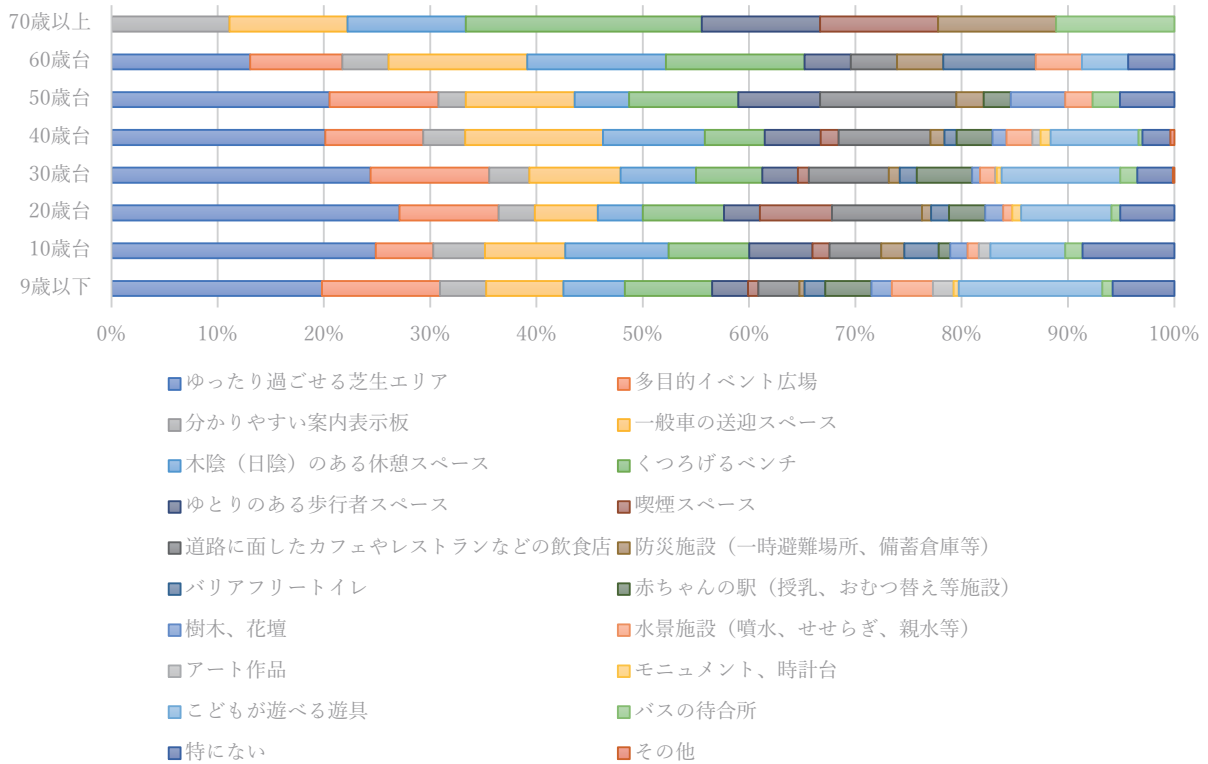


図7-4 JR茨木駅西口の駅前広場に必要だと思う施設（年齢）

出典：アンケート結果より筆者作成。

・地域

地域別の結果（図7-5）では、阪急茨木市駅の結果（図6-5）と比べ、西部の「ゆったり過ごせる芝

生エリア」、「多目的イベント広場」を選択する人が少ない傾向が出ている。

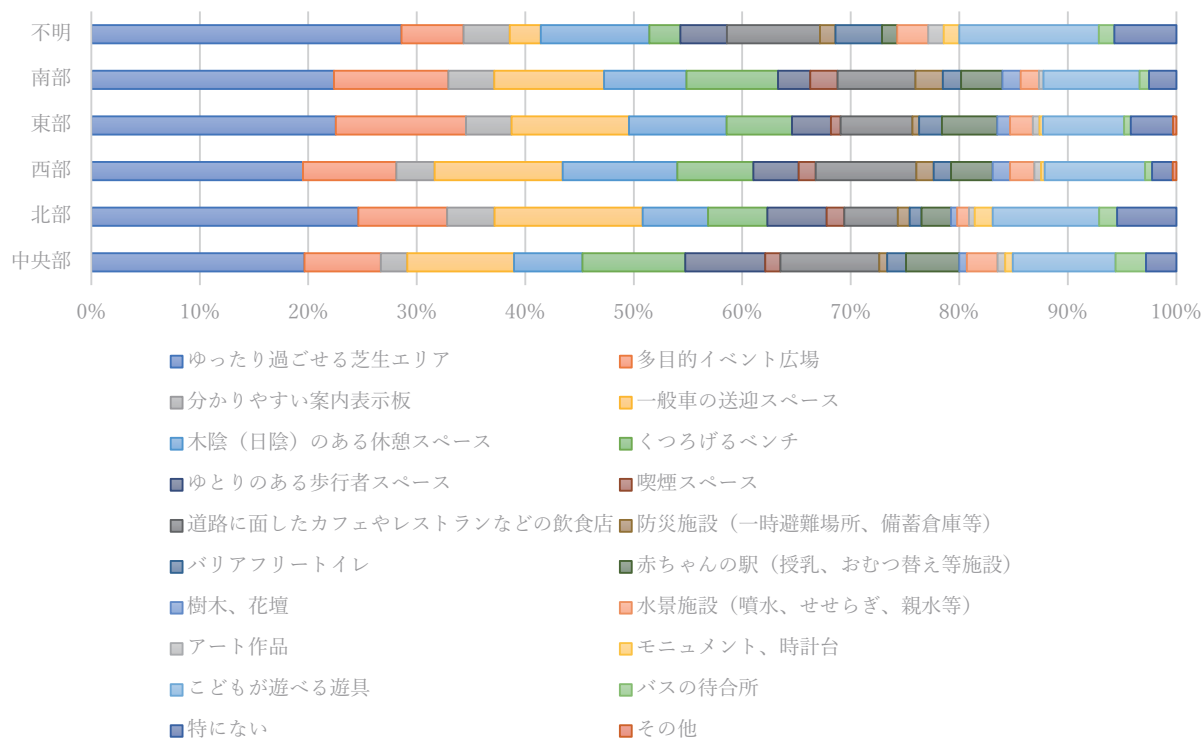


図7-5 JR茨木駅西口の駅前広場に必要だと思う施設（地域）

出典：アンケート結果より筆者作成。

8. 〈問7〉茨木市内で移動に利用・使用する手段は何ですか？（複数回答可）

最も多かったのは「自転車」で、全体の約53%の人が選択した。次いで「車」が約47%、「徒歩」が約22%、「バス」が約20%であった（図8-1.1）。多くの人が茨木市内の移動に自転車を利用しているが、この約53%は茨木市外在住者も含む数値であり、茨木市内在住者に限定すると約60%というさらに高い割合にな

る（図8-1.2）。また、同じく市内在住者と市外在住者との比較では、「自転車」以外の結果があまり変わらなかったところは注目すべき点である。特に「車」については市外在住者が高いことは想像がつくところであるが、市内在住者が市外在住者と同じ割合で茨木市内の移動に車を利用していることは、市内に11もの駅がある茨木市という交通便利性の高い場所にあっても興味深い結果である。

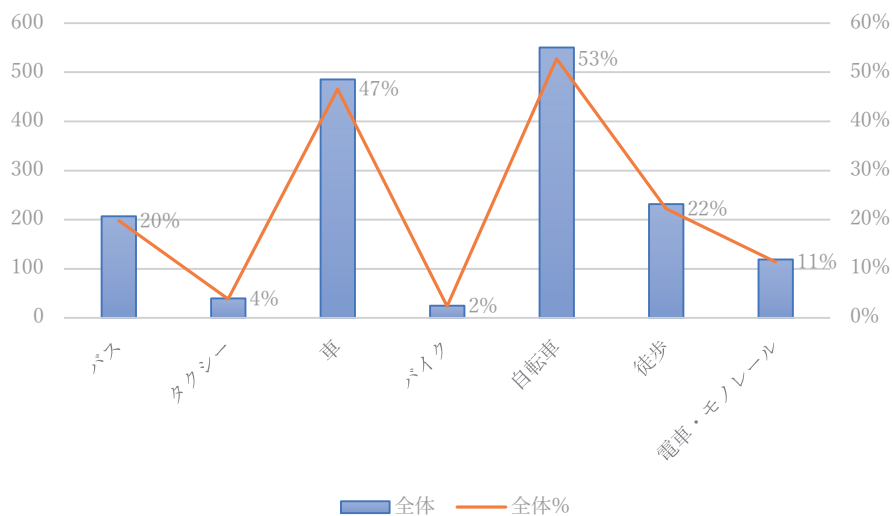


図8-1.1 茨木市内の移動手段（全体）

出典：アンケート結果より筆者作成。

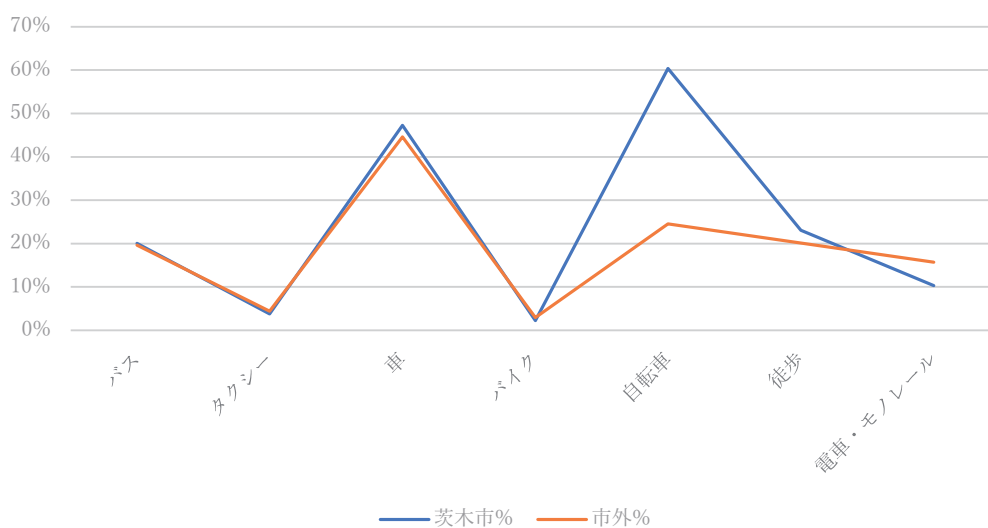


図8-1.2 茨木市内の移動手段（茨木市在住者と市外在住者の比較）

出典：アンケート結果より筆者作成。

・性別

性別の結果（図8-2）を見ると、女性は男性に比べて「自転車」の選択割合が高く、女性が約55%、男

性が約48%であった。一方、男性は女性に比べて「車」の選択割合が高く、男性が約53%、女性が約43%であった。

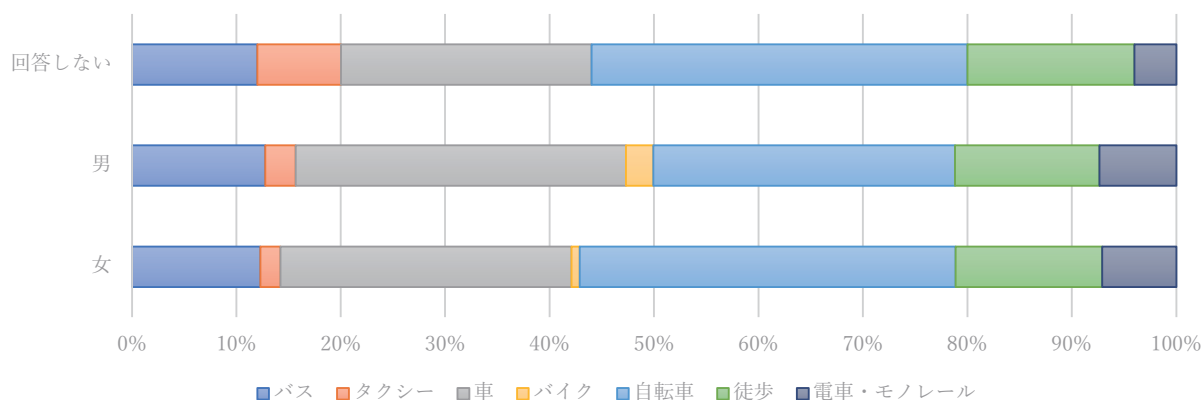


図8-2 茨木市内の移動手段（性別）

出典：アンケート結果より筆者作成。

・職業

職業別の結果（図8-3）を見ると、移動手段の全体結果（図8-1.1）で確認したように「車」と「自転車」の利用が多く、どの属性でも全体的な傾向としてはこの2つの選択が多い。属性ごとの違いは、「車」の選択が比較的が多くなれば、「自転車」の選択が比較的になくなる。「自転車」の選択が比較的が多くなれば、「車」

の選択が比較的になくなるという傾向が出る点である。例えば会社員・公務員と学生の選択割合をあげてみると、「車」では、学生の選択割合が低く約38%となっており、選択割合が最も高かったのは会社員・公務員で約50%であった。一方、「自転車」では学生の選択割合が約60%で会社員が約49%である。

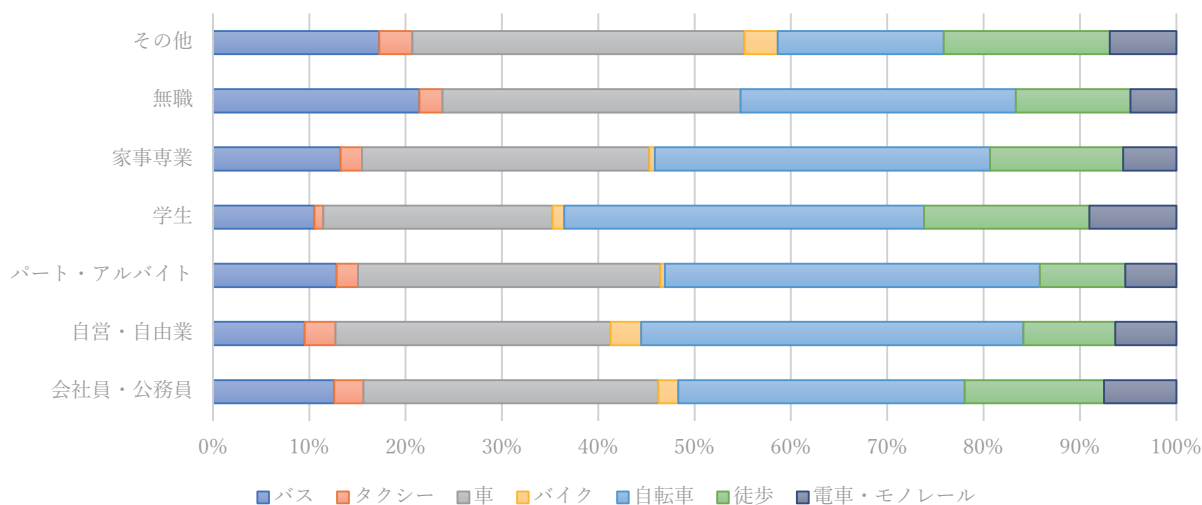


図8-3 茨木市内の移動手段（職業）

出典：アンケート結果より筆者作成。

・年齢

年齢別の結果(図8-4)を見ると、目立ったのは「自転車」の変化で、10歳台の選択割合が高く約70%の人が選択したが、20歳台では約35%となっている。10歳

台で非常に高かったのが20歳台で大幅に減少するのであるが、30歳台で約52%、40歳台で約55%と再び選択割合が上昇している。

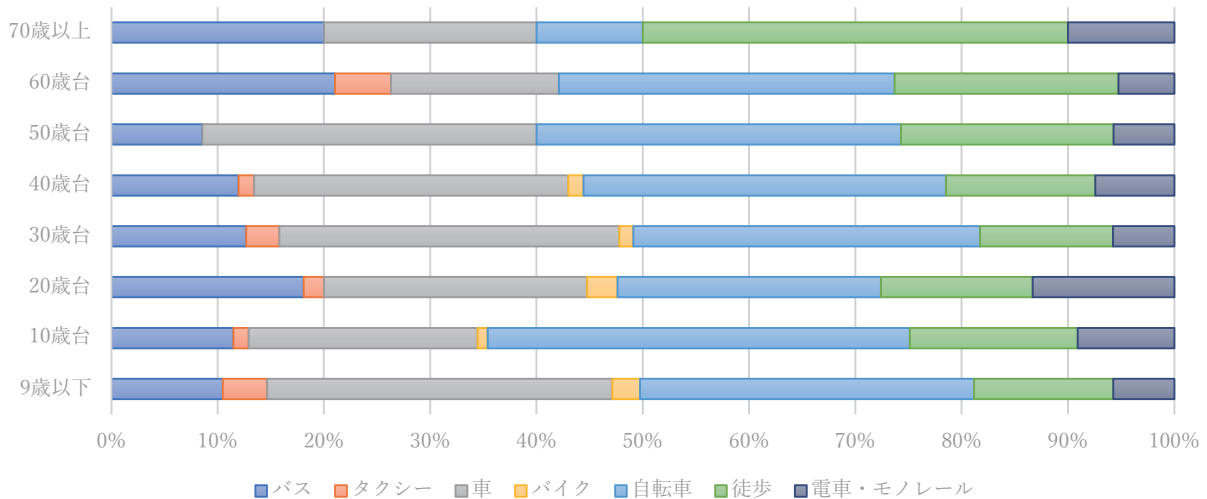


図8-4 茨木市内の移動手段 (年齢)

出典：アンケート結果より筆者作成。

・地域

地域別の結果(図8-5)を見ると、北部の「車」の割合の高さが目立つ。北部地域は駅までの距離が遠

い地区が多く車での移動が多くなるのは自然なことである。また、同様の理由から他の地域に比べてバスの利用も多いと考えられる。

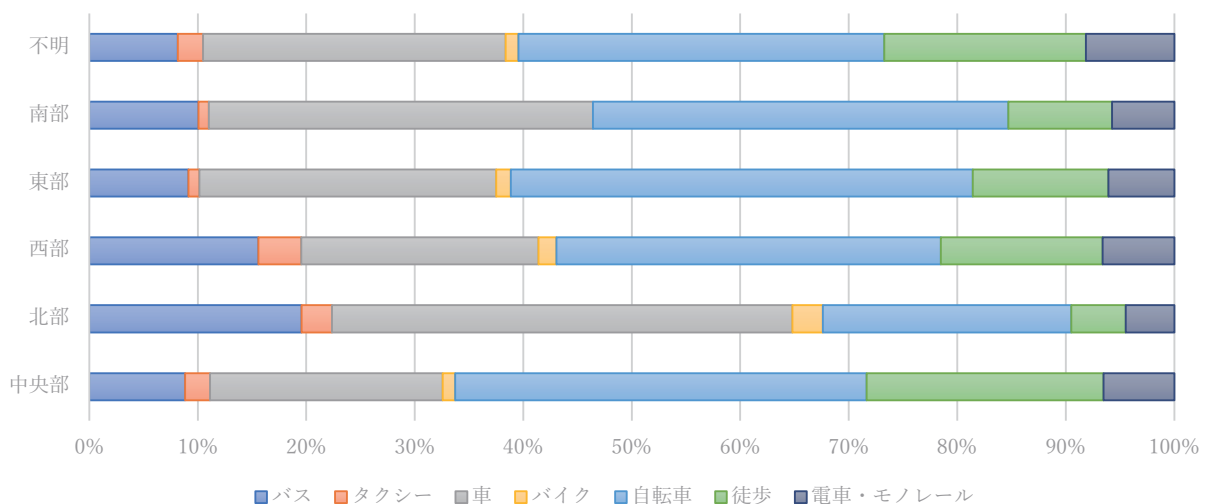


図8-5 茨木市内の移動手段 (地域)

出典：アンケート結果より筆者作成。

9. 〈問8〉 中心市街地（主にJR茨木駅から阪急茨木市駅の間）で人が中心の歩いて楽しいまちを実現するために特に必要だと思う施設は何ですか？（最大3つまで）

最も多かったのは「余裕のある歩行者空間」で、全

体の約30%の人が選択した。次いで「道路に面した1階部分の商業」と「ベンチ等の休憩スペース」が約28%、「自転車レーン」が約20%、「駐車場・駐輪場」が約19%となっており、交通関連の選択肢が上位となった（図9-1）。

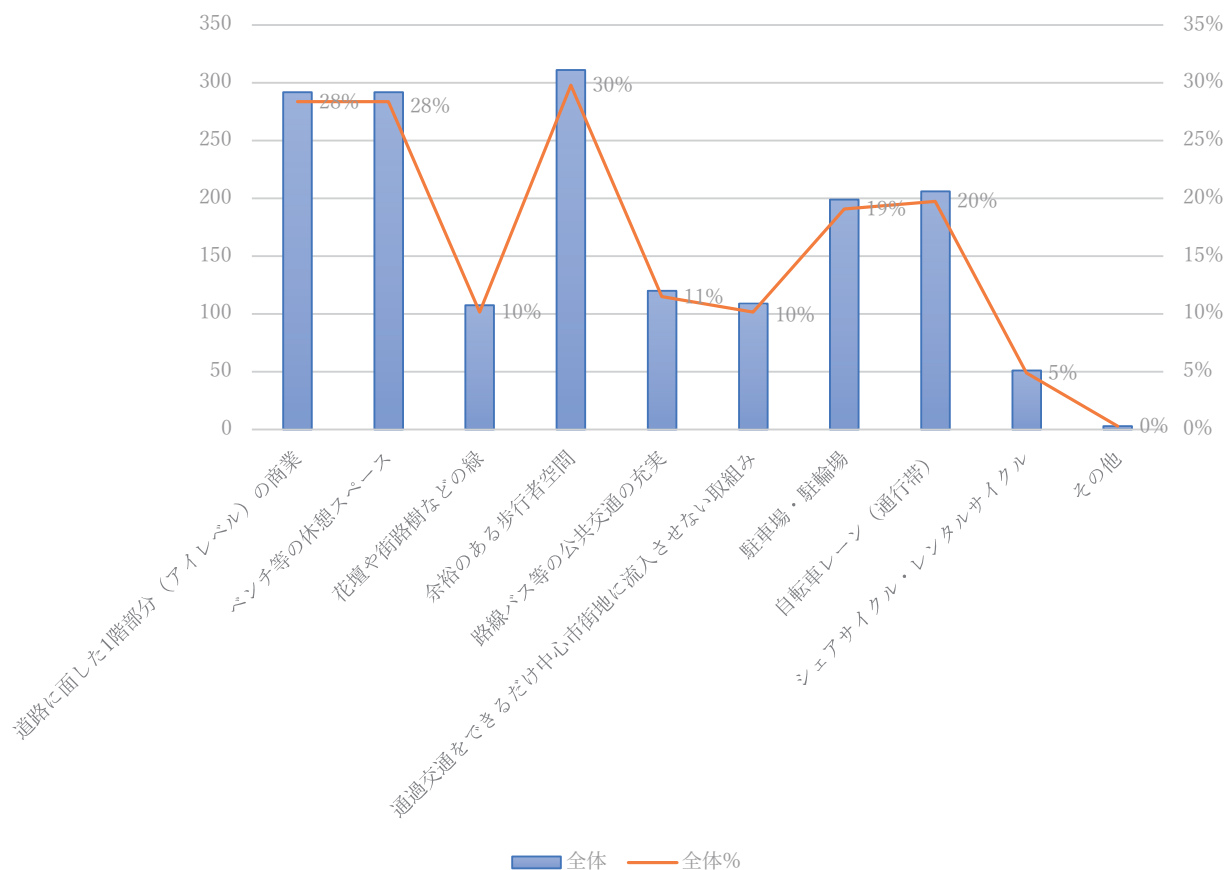


図9-1 中心市街地に必要と思う施設（全体）

出典：アンケート結果より筆者作成。

・性別

性別の結果（図9-2）を見ると、「道路に面した1階部分の商業」の回答割合が女性に比べて男性が多い。また、「自転車レーン」の回答割合が男性に比べて女性

が多く、図8-2で確認できた市内の交通手段で女性の方が自転車を多く利用する状況から「自転車レーン」の回答が多くなった可能性がある。

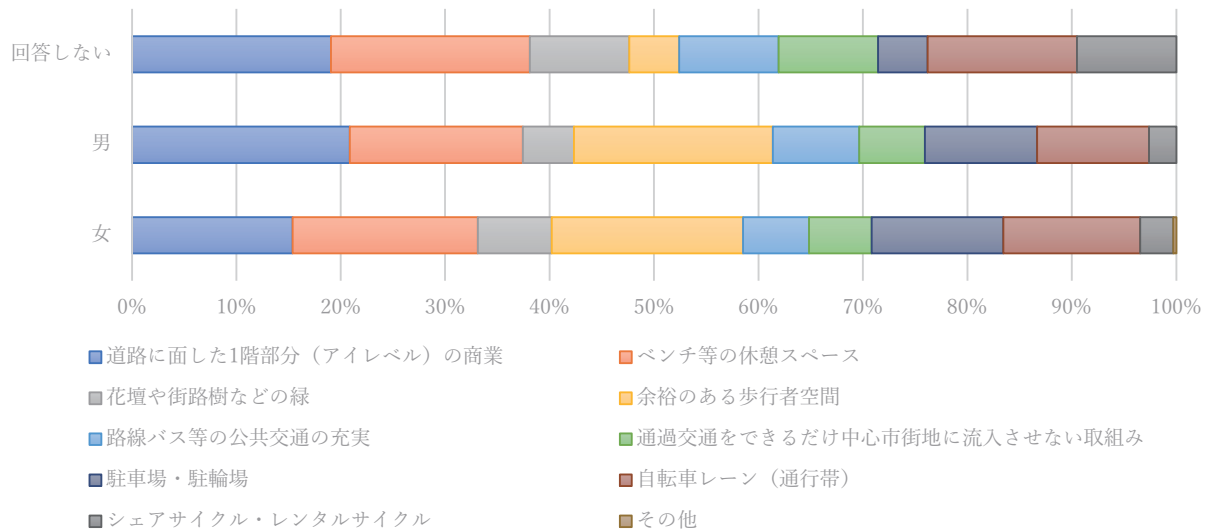


図9-2 中心市街地に必要と思う施設（性別）

出典：アンケート結果より筆者作成。

・職業

職業別の結果（図9-3）を見ると、全体的に大きな違いはないが、無職とそれ以外の属性を比べると違いが確認できる。特に会社員・公務員と無職を比較するとその差がやや大きく、「余裕のある歩行者空間」で

は、最も多く選択したのが会社員・公務員の約34%で、無職は最も少なく約13%にとどまった。また、「道路に面した1階部分の商業」でも、最も多く選択したのが会社員・公務員の約37%に対し、無職は最も少なく約17%にとどまった。

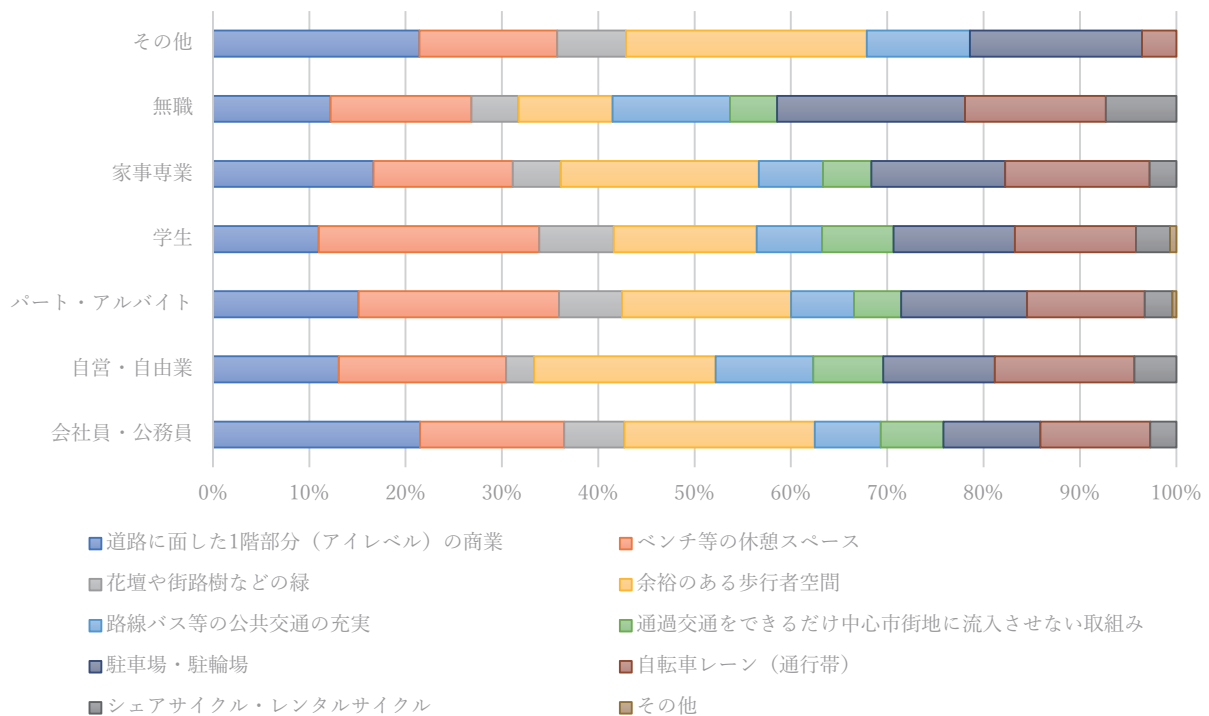


図9-3 中心市街地に必要と思う施設（職業）

出典：アンケート結果より筆者作成。

・年齢

年齢別の結果（図9-4）では、それぞれの選択割合はそれほど変わらなかったが、ここでは9歳以下の「自転車レーン」に注目したい。図8-4で確認できるが9歳以下も茨木市内の移動に自転車を利用するという回答が多い（選択割合は約47%）。そのため、9歳以下で自身に関連する項目である「自転車レーン」が選択されたことは自然なことである。また、2026年4月

1日より自転車の交通違反に対する罰則が強化されることも影響している可能性もある（警察庁）。ただし、道路交通法では13歳未満は自転車で歩道を走行することができる」と記されており（道路交通法第63条の4第1項、道路交通法施行令第26条）、9歳以下以外の人も含め、茨木市において正しい交通法規の理解が広がっているかを確認する必要があるだろう。

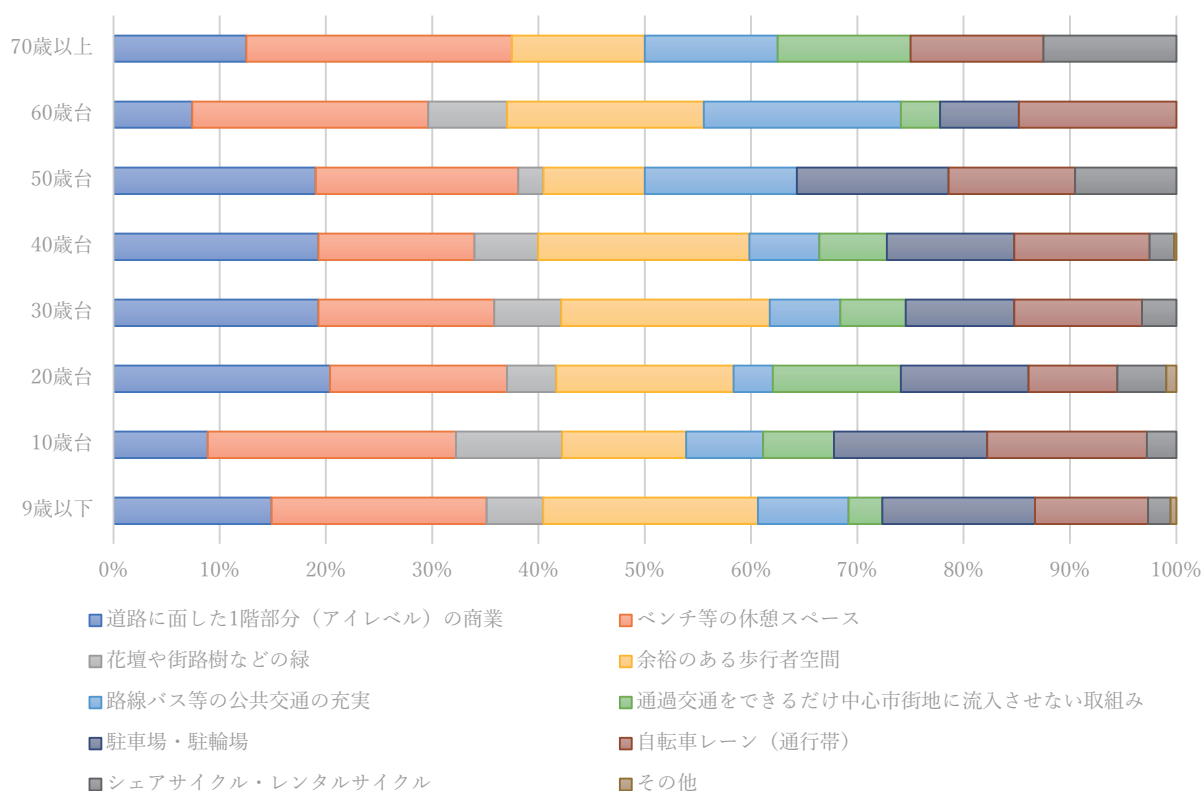


図9-4 中心市街地に必要と思う施設（年齢）

出典：アンケート結果より筆者作成。

・地域

地域ごとの結果を見ると、茨木市在住者と市外在住者の比較（図9-5.1）では、市外在住者に比べ茨木市在住者は「余裕のある歩行者空間」と「自転車レーン」で選択割合の差が大きく出た。また、選択の全体平均では、茨木市在住者が平均17%の選択、市外在住者が平均14%の選択となり、茨木市在住者のほうが楽しい

まちを実現するために必要なものが多いと考えていることがわかった。

茨木市の地域ごとの比較（図9-5.2）では、「路線バス等の公共交通の充実」で東部の選択割合が16%と高いのに対して南部が7%、「駐車場・駐輪場」で北部の選択割合が27%と高いのに対して中央部が11%と、地域ごとの差が出ている。

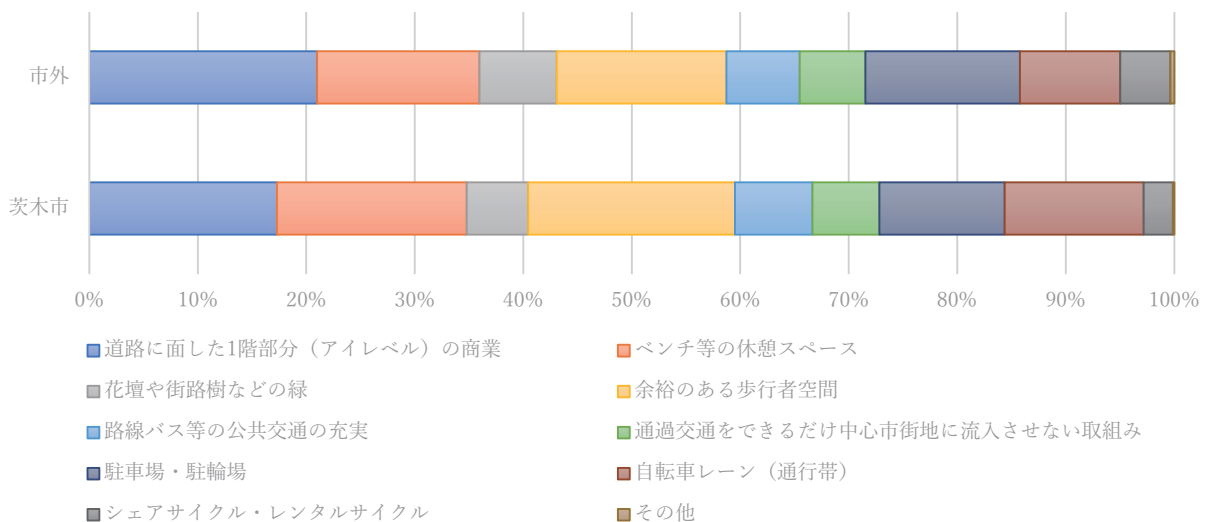


図9-5.1 中心市街地に必要と思う施設（茨木市在住者と市外在住者の比較）

出典：アンケート結果より筆者作成。

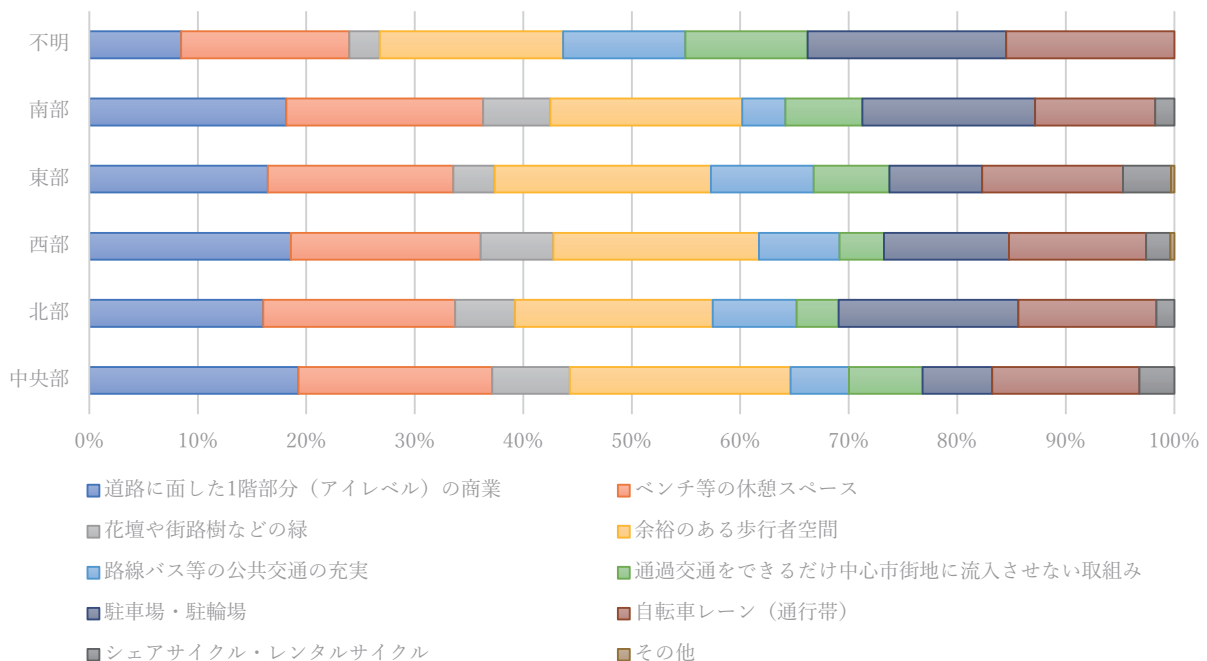


図9-5.2 中心市街地に必要と思う施設（地域）

出典：アンケート結果より筆者作成。

10. 〈問9〉 その他「茨木の交通と暮らし」について ご意見があればご記入ください。

任意回答の問9には79件の回答があり、内容を分類すると図10のようになる。「肯定・好意（11件）」では、「過ごしやすい」、「快適」、「魅力的」などの回答があっ

た。「要望・批判（44件）」では、渋滞に関する意見が多く、類似の意見は12件あった。そのほかには「歩道・自転車レーンの整備が必要」、「駐車場が少ない」などの回答があった。なお、記入が不完全で内容が判断できないものは「除外」とした。

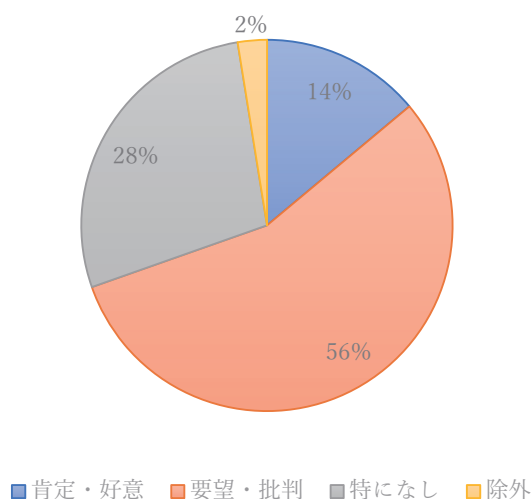


図10 意見内容の分類

出典：アンケート結果より筆者作成。

おわりに

本調査では、従来の設問に加えて職業に関する質問項目を設けたことで、交通の利用状況をより細かく把握することができた。特に、JRと阪急の利用選択において性別との関連性が一定程度見受けられた点は注目に値する。男性の方がJRを利用する割合がやや高い傾向がみられ、通勤時間や行動範囲との関連が示唆される結果となった。今後、通勤時間や通勤距離などの設問を追加することで、より精緻な分析が可能になると考えられる。

また、年代によって経済性と利便性の優先度に違いがみられ、それが駅周辺に求める施設・店舗の内容にも影響していることが確認された。若年層ではコンビニなど利便性を重視する傾向が強く、子育て世代や就業世代ではスーパーなど経済性を重視する傾向がみられた。駅周辺の商業施設整備を検討する際には、実際の利用者層と提供される施設内容との整合性を意識する必要がある。

さらに、駅利用目的の分析からは、高齢層におけるスポーツ・フィットネスや習い事への潜在的需要が示

唆された。現時点ではリカレント教育や文化活動への参加は限定的であるが、今後の高齢化の進展を見据えれば、学び直しや健康増進に関わる施設整備は重要な視点となろう。

阪急茨木市駅とJR茨木駅の駅前整備に関する設問では、両駅周辺の商業環境が異なるにもかかわらず、駅前に求められる機能には大きな差がみられなかった点も興味深い。芝生エリアや多目的広場など「滞在型空間」へのニーズが共通して高かったことは、駅前を単なる交通結節点ではなく、交流・憩いの空間として位置づける必要性を示している。

市内移動手段については、自転車と自動車の利用割合が高い結果となった。茨木市は交通の要衝であり物流拠点も多い都市であることから、交通量に関する課題意識は本年度調査でも自由記述回答に多く見られた。とりわけ渋滞や駐車場不足、自転車レーン整備に関する意見は継続的に指摘されている。2026年4月からの自転車交通違反に対する罰則強化も踏まえ、正しい交通ルールの周知と安全なインフラ整備を両立させることが今後一層重要となるであろう。

参考文献

- 葉山幹恭、宮崎崇将、村上喜郁（2022）「〈調査報告〉2022年度 茨木フェスティバル「茨木の交通と暮らし」アンケート結果分析」『追手門学院大学ベンチャービジネス・レビュー特別号』
- 葉山幹恭、宮崎崇将、村上喜郁（2023）「〈調査報告〉追手門学院大学ベンチャービジネス研究所・茨木商工会議所商業部会共同調査 2023年度 茨木フェスティバル「茨木の交通と暮らし」アンケート結果分析」『追手門学院大学ベンチャービジネス・レビュー特別号』
- 葉山幹恭、宮崎崇将、村上喜郁（2024）「〈調査報告〉追手門学院大学ベンチャービジネス研究所・茨木商工会議所商業部会共同調査 2024年度 茨木フェスティバル「茨木の交通と暮らし」アンケート結果分析」『追手門学院大学ベンチャービジネス・レビュー特別号』

参考資料

- 茨木市産業情報サイトあい・きゃっち「地域分けについて」（<https://www.i-catch.city.ibaraki.osaka.jp/about/36.html>）、閲覧日：2026年2月10日
- 茨木市「町丁字別人口・世帯数（令和7年8月31日現在）」（https://www.city.ibaraki.osaka.jp/material/files/group/2/cho_07-08.xls）、閲覧日：2026年2月10日
- ザイマックス不動産総合研究所「通勤ストレスがワーカールの満足度に与える影響」2019年6月4日公表（https://soken.xymax.co.jp/report/1906-worker_survey_2019.html）、閲覧日：2026年2月10日
- 警察庁「自転車の新しい制度自転車ポータルサイト」（<https://www.npa.go.jp/bureau/traffic/bicycle/portal/system.html>）、閲覧日：2026年2月10日